



統一

目次

統一團新年會の挨拶	本多
國家の興隆と佛法の興隆	本多
價值見直しの時代	武田
法華經要文講義	本多
罷睡録	山根
日蓮主義より見たる無量義經	井村
記事報導	日東

第廿九年九月號

本多日生現下施用著書一覽

- 法華經自我講義 拾部 特價 金貳拾錢
 - 法華經要文 (賣切れ) 上製 金貳拾錢
 - 教育勸語と思想問題 拾部 特價 金貳拾錢
 - うゐの奥山今日こえて 拾部 特價 金貳拾錢
 - 此の際に於る吾人の覺悟 拾貳部 特價 金拾貳錢
- 以上各送料一部金貳錢

統一編輯局

名古屋市東區田代町城山
電話 東五四八七番
振替 名古屋一〇八一九番

料告廣一統	價定一統	
	一冊	一冊
表紙一頁	金貳拾錢	送料共
半頁	金壹圓貳拾錢	送料共
四分一頁	金貳圓貳拾錢	送料共
金	五	四
事之金前	事之金前	事之金前

大僧正本多日生師著 國と人と教

一部金拾五錢 送料金二錢
拾五部特價金壹圓 (送料共)

發行所 統一編輯局

名古屋市東區田代町字城山
振替口座名古屋一〇八一九番

大正十三年十二月十七日印刷納本 (第三百五十八號)
大正十四年一月一日發行

製複許不

編輯所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
印刷所 名古屋市中區千種町字五反田五二番地
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
印刷所 名古屋市中區千種町字五反田五二番地
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地

第一卷
第二卷
第三卷
第四卷
第五卷

既刊

第一種…一冊時 金貳拾五圓 送料…實費
第二種…每月時 金五圓拾錢 送料…不要
第三種…隔月時 金五圓拾錢 送料…不要

優陀那院
日輝聖人著

充洽園全集

全七拾名
卷限り募集

内

容

- 第一卷 は法華經の解釋と題目の要議とを詳しく説明したもので別して法華經の品々を妙法五字に結歸した事題目の原理と應用とを徹底的に論じた事等が本書の特色である。
- 第二卷 は絶特の三寶に歸命する種々の式典と大聖人出世の本懐たる本尊妙法に唱題に關する御書書の概要を説かれたのが本書の特色である。
- 第三卷 は法華經哲學の一念三千論と宗教の生命である本尊問題等を委しく説いたのが本書の特色である。
- 第四卷 は宗學上最も難解とせられた本迹問題を快刀亂麻を斷つが如く説かれた本迹論と理實のまゝの莊嚴な世界に移り行く本化の事觀論等を恰も掌中の珠を見るやうに明かに示されたものが本書の特色である。
- 第五卷 は限り無き廣い法と盡る無き深き教へとが何人にも解るやうに説かれた初心要義は本書の特色である。

静岡縣清水港竹町妙慶寺内

發行所

日宗靜岡支社

振替口座(東京六〇七〇五番
名古屋一〇四八〇番)

統一團新年會の挨拶

總裁 本 多 日 生

(大正十四年一月五日於東京統一團)

東京在住の本宗僧員並に統一團會員の諸君と共に、茲に大正十四年の新年宴會を開くことになりました。斯の如く盛大なる會合を催すことを得ましたのは、洵に欣幸に堪へない所であります。東京在住の本宗僧員は大震災の後を受けて、各自の寺院の經營に於て相當の困難あるにも拘はらず、更に廣くこの思想及び信仰の爲に統一團の事業を翼賛せられて、多忙の裡にも繰合せをして始終この統一團の事業の爲に援助を與へられることを、この際に謹んで御禮を申す次第であります。又團員の諸君に於ては、やはり大震災後のいろいろなる事情のある中に信仰を繼續せられて、却つて年と共に信仰が増進をして、この新年宴會なども、多くの會合は極く形式的なものであるけれども、我が統一團の會合は頗る精神的の集りである。別段に儀式も莊嚴ではない、又宴會の設備も大したことでありませぬけれども、併し茲に一堂に集つて心靜かにお經を誦み、さうして一杯の屠蘇を味うた時に、一種言ふべからざる所の精神生活の光が漲つて居ることを私は認めるのであつて、いろいろの會合に出席をしますけれども、我が率ゐて居る所のこの統一團の新年宴會の如きは確かに神聖なる價值ある會合として、洵に愉快に感ずる次第であります。又平素の講演會に於きましても、廣告なども左程な準備をしないのでありますけれども、毎回相當の聴衆を得て東京に於ける各種の宗教的團體及び精神的團體の會合に比較しましては、我が統一團が相當の成績を挙げ

豫

約

募

集

録目容内

- 佛教思想大系 大僧正 本多日生撰下
- 現代思想批判 文學博士深作安文先生
- 近代の宗教思潮一般 文學博士矢吹慶輝先生
- 辯論學 加藤晴堂先生
- 法華經開結二經の講義 僧正 井村日成師

社會教化講習會講演集

定價一部
金五拾錢

申込所 東京市小石川區白山前町十六

統合宗學林内 小林啓善宛

特典 十部以上の申込には送料を要せず。

百部以上は一部四十錢の割合

發行日 大正十四年一月二十日

注意

學生の身分で金がありませぬ随つて品物をお送りしたなら直ぐに御送金を願ひ度いと思ひます。講習會に御出席の講師及び本宗僧侶の方方には特に十部以上御申込下さる豫定ですからどうか目算の外れないやうに何分の御援助を希ひます。

て居るといふことは、洵に愉快に感ずるのであります。これ偏に團員諸君の信仰精神の然らしむるところでありまして、どうぞ今日有して居られる所の諸君の信念、及び道念、この精神生活の光を飽くまでも維持せられたい。世の中はいろいろに變化し面倒になつて行きますけれども、結局残るところはこの精神生活が一番大切であつて、あとはその時々でいろいろ變化して行くのである。その事の内には大事な意味があるけれども、本當の絶対的の價値を有する事といふものは世の中に極く少ないのである。この信仰の上からして營まれて居る事柄のみは、これは永遠不朽のことであつて、眞に價値あることでありますからどうぞ今後一層その信念及び道念を磨いてお出でになることを希望する次第であります。

この機會に私の新年の所感について一言して置きたいと思ふのでありますが、吾々同志諸君と共に日蓮主義の擁護宣傳に従事をして、いろいろの困難を拵して十年一日の如くに今日に來つたことは、これはお互の喜びであり、誇りでありますが、併し世の中の状況は中々激しい勢ひを以て變化しつゝあるやうに思はれるのである。殊にこの人生生活の状態から見ても一層激烈なる生活難と言ひますが、世相の變動といふものが激しい有様に起つて來つゝあると思ふのである。そこで茲に二つの潮流が流れると思ふ。即ち或る誤れる方向を辿る者は、一層物質的に且つ利己的に流れて、逆も人の世話などは出来ない、善根功德を積むなどといふことは逆も及びも附かぬといふので益々悪くなり、益々濁つて、さうして滔々として社會は腐敗墮落の方に向はんとするであらうと思ひます。併ながら一方には、このやうな有様で行つては人生の幸福は全滅されてしまふ。又社會はそれが爲に非常な蹉跌を來すに相違ないといふことを憂へて、精神生活の必要を感じて一層今日以上に信仰を磨き、又教の宣傳に盡さなければならぬといふやうな感じを持つ人も起つて來るのである。それ故に先づ今後の社會事情といふものは二つの激しい潮流を描くと考へるのであります。

それは一般の人文に就いて、人生生活に就いて申すのでありますが、又日本の國家の現状に就いても、茲に恐ろしい二つの渦巻が流れて來ると考へるのである。本年は御承知の如く三派聯合の内閣に依つて、普通選挙即ち衆議院議員選挙法改正案なるものを議會に通過さすといふことであります。普通選挙は無理論としては、一般の男子二十五歳以上の者が選挙権を有するといふことは、何も珍らしいほどのことではないと思ひますけれども、この一般民衆に選挙権を與へたといふことからして政界に渦巻を起す、その有様は、私は日本人の自覺が足らぬ爲に、必ずしも健全なる方向に行くとは信ぜられないのであります。さうしてそれに引續いて起る問題は貴族院の改革案でありますが、これも或る程度の改革といふことは無論必要でありませうけれども、貴族であるとか、特權階級であるとかいふこの二院制度に對して極力これを攻撃して、さうして一般普通民衆の力に依つて一切の事をやらうとして戦ふ、この勢ひはどうしてもこの社會に一種の變動を起す前徴であると考えます。政治家は多數の賛成を得なければならぬから、斯ういふ機運になつて來たならば、人よりも一倍早く普通選挙に賛成をし、又貴族院改革などにも、腹の中はどうかあらうとも、兎に角表面はその改革案に賛同を表して行かなければならぬ、といふやうなことに相成る。憲政會が急げばより一歩早く政友會が先へ出ようとする、政友本黨は更に取れないやうに蹶歩で行かうといふやうな態度を執ります。そこに又無産階級の煽動者が居りますこと故に、私は本年これが議會を通過して進んで行く景況といふものは、日本の政治界及び社會事情の上に大激變を來すと考へます。「これは

やり損うた」と気が附いた時には、最早や後へ戻ることも出来ないやうな機運が起つて来る。その政治界から起す變動からして、従来の日本の道徳、日本の社會習慣、或は宗教に對する關係といふやうなものにも多大な刺戟變動を喚起さんとするのであります。これは時代の勢ひ己むなき状態に進んで居りますけれども、この際に於て一層この民衆が自ら反省をして、國民としての責任、國民としての負擔をしなければならぬといふ側を十分に考へるやうに、これを教化しなければならぬと思ふのであります。吾々は直に政治上に就いて運動をする考は有らませぬけれども、政治上の斯様な變化からして、宗教家は一層人心教化の必要を痛感する次第であります。必ず政界には二つの衝突を起す所の潮流を描くと思ひます。さうして私共は政治界のことはよく知りませぬけれども、或る人々はその所謂多數民衆の贊同を得るが爲に、突飛な思想を以て世に進んで行くものだと思ひます。多數はどういふ状態になるかと言へば、どうしても自分自身の生活とか利益といふことを眼中に置いて、國家とか社會とか全體といふことは結局耳に入らぬやうな傾向を執りはしないか。これは或は吾輩の杞憂であるかも知れぬ、日本人は賢明であつて、縱令如何なる無産の者でも低級なる者でも、國家社會の問題の爲には自己の利害を犠牲にして、さうして國の爲め、世の爲め、全體の爲めに正義を執るかといふと、私はそこに一種の疑ひを有つので、どうも現在押寄せて來た所の日本の一般民衆の情勢から言へば、餘程大事なことをそれが爲に誤るやうなことが出来はしないかと思ふ。

茲に於て吾々日蓮主義者は大に奮起する必要があらうと思ふのである。日本の國情に就いても、又一般文化の趨勢に就いても、大に法華經の教を以て訓化をして、所謂堂々たる人格を國民の間に造らなければならぬ。宗教としても單に自己一身の利害を以てのみ考へるところの宗教觀念ではなく、又博く世界の平和を愛するからと言つて國家を忘れたる所の所謂漠然たる平等博愛主義ではなくして、日本の國家を中心にして、さうして内には國民の安寧幸福を保全し、外には世界の平和に貢獻して行く、所謂轉輪聖王の理想といふものは私はそこだと思ふ。飽くまでも正義を主張して全世界の爲に盡すけれども、その國の立場を維持して、その國の威力と、その國の正義を保護する力を自己に有して、決して他力主義でなくして日本の力に由つて正義を擁護し、日本の力に由つて正義を擁護するところの威力を持つといふ、何處までも日本乃至一閻浮提といふこの轉輪聖王の理想を日蓮聖人が力説されたのである。ちよつと考へるといふと、個人主義、多數の民衆の幸福、或は全世界の人類の幸福、斯う言つたならば國家といふやうなことを考へるよりは非常に意義が廣いやうにもあり、適切なやうにも見えるけれども、そこに過ちを探るのである。何時の時代でもそれが爲に過ちを探るのであるから、そこで日蓮聖人の御主張になつたが如く、何處までも正義を擁護し、何處までも民衆を保護するけれども、その中堅を正法と國家に置いて、その正しい教と、さうして理想の國家といふものを擁護して、内に外に發展して行くといふ、この日蓮主義の特色を發揮しなければならぬと考へるのである。

これは餘程大事な問題と相成つて來ると思ふのである。今は議會が開かれて居るのでありますこと故に今より五六十日の間を御覽になつて居つたならば、必ず日本の政界には一種の渦巻を喚起して來ると思ひます。實はそのことに就いては自分にも直接意見を述べて見たいと考へて居る點もありませんけれども、それは表向の仕事でありませぬから、今日茲には申上げませぬが、私は日本國家の前途の爲に、この大正十

四年といふものは容易ならざる年である。これはうまく國民を導いて行けば日本は大に復興をし、大に發展をする國家となるけれども、たゞ民衆の機嫌を探り、さうして輿論にのみ媚びて行くといふやうであれば、そこに煽動家が現はれて騒ぐやうであつたならば、日本は大失脚を來すであらうと考へるのであります。斯る場合に於て日蓮主義の使命は自らそこに輝いて居ると思ふのでありまして、どうぞ諸君と共にその點に就いて一層愛國の精神と護法の精神とに生きて、さうしてこの日蓮主義を引つ提げて奮闘しなければならぬといふ覺悟を、この新年劈頭に一層温めて置きたいと考へた次第であります。

いま一つ申上げたい事柄は、この教の爲に盡すといふことも、だん／＼年數を経て來ますといふこと、所謂時に倦怠を生じないとは言へない。お經の中にはそれが爲にその事を繰返し／＼誡められて居る。放逸といふことも倦怠といふことは、この正法を擁護するとか、國家を擁護するに就いては一番の禁物であります。只今の岩野閣下の御話にもありましたが、倦怠を生じないといふことは實にその事に當つて居る者の直感して居る言葉であります。現に法華經の中には、法華經の行者は倦怠を生じないといふことが盛んに説いてあります。「不愉快の心を以てこの經を説け」といふことを繰返して言うて居られる。それから提婆品の如きにも、千歳の長きに亘つて給仕をしたけれども「心身懈倦なし」といふ言葉がある。この「心身其に倦むことなかりき」といふが如きは、實に立派な言葉であると思ふのである。吾々は随分この法の爲に盡してから以來長いからして、時には倦怠の心が生じないと言へないけれども、どうぞこの大正十四年も勇ましく奮闘を續けて行きたい、どうぞ身體の健康を維持して、大正十四年も法の爲め、國の爲め、人の爲に盡し得たならばそれ程幸福なことではない。どうぞ此處に集られたる諸君と共に息災延命にして、

身體の健康を維持し、精神の覺悟を堅め、さうして大正十四年も法と國と人の爲に奮闘を續けて行きたい。どうぞ諸君は只今申す所のこの倦むとか、疲れるとか、怠慢になるとかいふやうなことを諷めて、何處までも一層勇氣を鼓舞して奮闘せられんことを望むのであります。

これが即ち功德を生む根源であると思ふのである。宗教の仕事は結局勝利といふものは何處にあるかと言へば、即ち左様にして爲し得たる間に積んだる功德そのものが即ち利益であるのである。その功德善根は、今日のやうないろ／＼國家の現狀なり、或は人文の上に現はれる所の變動などに對抗して、そこに正しいものを打樹て、行くといふこの努力奮闘、これが即ち大功德を成する所以でありますから、どうぞこの間に倦怠を生せず、退轉を生せず、益々勇ましく最後まで戦ふところの元氣を維持せられんことを希望するのであります。私は自らの所感としてはどうぞ本年も健康にしてこの護法軍の一人に加つて奮闘を續けたい、どうぞその健康を維持して行きたいといふことを切に願つて居る次第でありまして、諸君と共に一層の奮闘努力を繼續致したいと希望する次第であります。これを年頭の所感として申上げて置きます。

大僧正本多日生猊下著
國と人と教

發行所 名古屋市東區田代町城山
統編輯局
振替名古屋一〇八一九番

(一部金拾五錢送料二錢)
(拾五部特價金一圓(送料共))

國家の興隆と佛法の興隆

(中ノ二)

本 多 日 生

モウ一つの内に於ける大きな謬見といふものは所謂日本文化の誤解であつて、即ち徳川の最初の頃から起つた思想で、所謂佛の思想といふものが、儒者の側からと神道の側からと兩方から起つて居るのである。儒者の方で排佛の思想が燃えて来たのは、朱子學をやつた林羅山とか伊藤仁齋とかいふやうな、彼の儒者といふものが獨立するに至つて頭を擡げたのである。徳川の初めに來る迄は、日本には儒者といふ特別の學者は居らぬ、儒教でも皆坊さんがやつて居つたのである。歴史を御覽になれば分る通り、豊臣秀吉の時分に支那から手紙が來ても、之を讀む者は坊さんであつた、北條の時代、足利の時代、みな坊さんである。平安朝の時代でも學問の事を掌つて居つたのは無論坊さんである。何も儒者らしい者は居らぬ、第一儒者といふやうな名前が無い。唯菅原道真といふ人が俗人であつて學者のやうだけれども、是は無論佛法を厚く信じて居る人である。後の儒者のやうに佛法に敵對する人は居ない。此の永い歴史を御覽になつたならば直ぐ分る、或は彼の和氣清麻呂が道鏡の問題に就て宇佐八幡へ行つて、妖僧を斬るべしといふ事を言つた、彼は佛家であるかといふとさうではない、非常な佛法の擁護者である。叡山の大権越である佛法の信心家である。唯道鏡といふ者が悪い坊主だからあの妖僧を誡しめたのであつて、少しも佛法そのものに反對はして居らぬ、寧ろ佛法の爲にあつて坊主が居つてはいかぬといふ事から心配せられたので

ある。之を捉へて藤田東湖が正氣の歌に「妖僧肝膽寒し」と言つたならば、それと同時に佛法のごとく腹を抉つたやうに思ひ出したのが、明治維新頃のヘツボコ學者、ヘツボコ書生の頭腦である。坊主の悪いのと佛法の悪いのとは違ふ。坊主にけりや袈裟まで憎い、袈裟にくけりや佛法呪ふといふやうな事は、馬鹿が言ふ事である。それは多勢の坊さんであるから、其中には色々の方があらうけれども、さう言へば政治家の中にもあれば、軍人の中にもあれば、教育家の中にもあり、實業家の中にもナンボでもある。坊さんばかり特別な神様の子ではない、やはり同じ普通の人間から出て來た人の子である。寧ろ世間の悪い者を坊さん仲間へ餘計よこして居るのだから、坊主の中に十人の悪い者があつて政治家の中に一人の悪い者があれば、それで五分々々ぐらゐるものぢや。所が政治家などの方が今日ではズツと悪いだらう、坊主が悪いと言つた所が、サウむやみやたらに悪い事をしやせぬ、今の世の中の政治の状態は、その内幕を暴露して見たならば、殆ど驚くに堪へたるやうな事が疑獄事件として盛んに起るのである。坊主にも少々悪い事はあるけれども、併し世間を騒がすやうな教科書事件であるとか、或はシーメンス事件であるとかいふやうな、さういふ賑かな大きな問題は曾て起した事はない。して見れば坊主の方がまだ善いといふ事が分る。唯だ悪いといふ言へば宜いやうに思つて、生臭坊主、くそ坊主といふやうな事はかり言ふけれどもそんな事を互に言ひ合ふのであつたならば、こらくそ官吏、こらく馬鹿教員……いくらでも言へる話である。そんな事を言つて佛法を呪ふといふ事は、昔から馬鹿がさういふ事を言ふのである。歴史を見ると彼の「國史略」といふ書物を書いた早苗といふやうな男が、頑冥固陋な親父であるから、何からよつと坊主に悪い事があつたならば、それを捉へて非常に佛法の悪口を言つて居る。所がよく見ると

其の悪口を言ふ種が道鏡の問題に限つて居る、その他幾らもないのである、二つか三つの種に過ぎない。此の千數百年の永い歴史に二つか三つしか悪い所を擧げる事の出来ない程、佛法は立派なものである。若し嘘と思ふならば擧げて見たら宜い、いつでも問題はきまつて居る、手品の種は一つぢや。此の永い歴史を経て居るのであるから、佛法のさういふ悪い材料を擧げやうと思へば幾らでもあるべきであるけれども大して無い。それ程佛法は立派であつたといふ事を反證して居る。早苗の國史略を書いた頭腦といふものは實に悪い事である。此の永い間全國の津々浦々に涉つて無學文盲の爺婆等を善心に導き、殺伐なる氣象を警め、或は殘忍なる性質を和けて、慈悲博愛の精神に基いて善根を積めよといふ事を教へた効果といふものは、この位大きなものか分らぬ。其の大きな効果を、唯一人の坊主が悪かつたといふ事で差引勘定をして佛法を呪ふといふほど、さういふ不賢明なる人間が非常に多かつた。けれども今でもやはりさう思つて居る者がなか／＼多い、「妖僧肝膽寒し」といふ一句で佛法を葬り去つたやうに思つて居る者が、役人や教育家の中には殊に多いのである。

そこで佛法を呪ふ所のさういふ儒者輩が出て來たのは徳川の初めであるが、是は朱子學に執られたもので佛法計りを呪つたものではない、我が國體も併せて忘れて居る手合である。大体が物徂徠でも林羅山でも其他大部分のあの時の儒者は、十中の九まで國體も分らない支那心醉者である、湯島の聖堂は徳川の大學校であるが、そこには日本の歴史を一つも研究しない、六國史といつて古事記とか日本書記といふ日本の大切な皇室を中心にした歴史を知らなければ日本が分らないのであるが、それを少しも讀まない、大体その書物が無い。光圀卿が之を慨かれて、六國史を聖堂に寄附せられた。それも唯普通の書物を寄附したのではどうしてしまふか分らぬといふので、表題の所から初め一枚位は自分で筆を執られて、清和天皇何代の後胤源朝臣徳川光圀といふやうに自分の名前を書いて、之を粗末にしたら首を刎ねるぞといふ意味を示して寄附せられた爲に、これは大變だ、粗末には出來ないといふので漸く聖堂に保存したといふ位である。その位當時の儒者といふ者は國體の考もない、何も佛法を罵つた計りではない、大体が譯のわからぬ人達である。林羅山などは、日本は支那の出店である、東海の姬氏國といふのは周の泰伯といふ者が來て日本を開いた、周の未孫であるといふ事を言つて居つた。それで上野の東叡山を開かれた天海僧正が非常に憤つて、「貴様は國體を知らない者だ、モウ一遍言つて見よ、其の分には置かぬ」と言つて叱りつけた事がある。

所があの時分に儒者が佛法の悪口を言ふのも一つの理由がある。當時坊さんは非常な勢力があつて威張つて居つたものである。それは上野の天海僧正などは、將軍の側に行つて政治の樞機にも參畫するし、登城するといつても大勢の從者をつれて堂々とかやつて來る。羅山などはお茶坊主みたやうなもので、「コラ羅山」と言はるれば、「ヘーッ」と言ふやうな身分である。その調子でふだんやられたものだから、筆を執つて書く時分には、平生の鬱憤を晴す爲に悪口を言つたものである。徳川時代の佛教の勢力は大したもので増上寺とか、寛永寺とかいふやうなお寺が澤山ある。儒者などは裏長屋に住んで家賃もろくに拂へない、月給もなければ月謝もない、僅に二十錢か三十錢の束脩といふものを取つて書物の講義をして、豆腐を食つて生きて居つた。忌々しくてたまらぬといふので悪口を言つたものである。儒者と儒者との間に悪口を言ひ合つた書物が遺つてゐる、「奇々妙々」といふ表題の本であるが、それは實に奇々妙々な悪口ばかり書

いてある、頑冥固陋狹隘偏屈、語るに足らぬ者が多い。さういふ者が弟子を集めて、青表紙を教へたのであるから、そこで譯の分らぬ頭腦で、佛法ナンといふものは夷狄の教である、寂滅の教であると言つて吹き込んだ。何も知らない所の青二才共が、成程佛法はさういふものか、詰らぬものだと言つたのが各藩の子弟である、何も知りませぬ、本當を言つたならばさういふ者に依つて日本の文化は謬られて居るのである。

モウ一つは神道の方から來た排佛の思想である。是は神道に於て荷田東隱、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤といふ四人が偉いといふので神道の四傑と言はれて居る。向ふでは四傑かも知らんけれども、こつちから云へば何でもない。日本の國体を擁護するといふ觀念は無論良いけれども、それは何も神道だけのものではない、億兆心を一にして世々厥の美を濟したもので、何も國体を擁護するのが神官の専有ではありはしない。然るに彼等は神道といふものは皇室の御先祖から來て居るといふ事を誇り顔に擔いで、さうして本家本元ちやと言ふ。さうではない、神官といつても同じ人民である、吾々にして見た所が烏帽子を冠つて笏でも持てば神官だ、大本教の王仁三郎でも神官だ。それを神官の方が皇室に近いといふやうな事を言つて、皇室を笠に着て思想を合法的に研究することをしない、そこに非常な悪い所がある。國体を研究するといふことは神官に限つたものではない、國民一般の共通したる點である。それを佛法は印度から來て釋迦の提灯を持つものだ、神道は日本固有のもので國体を明かにするといふやうに考へた。眞に國体を開明したる者かは、歴史に依つて考へて見たらわかる。神道の事の明かになつて來た最初は傳教大師である、傳教大師に至るまでは日本の神道の事は何もわからなかつたものである。それから弘法大師が

た、それ迄は神道といふ名前も無ければ、學者も居らなければ、何も無かつたものである。傳教大師や弘法大師が日本の文化を開く中に、日本の國体を研究して、さうして皇室の尊嚴、敬神の觀念を併せて發揮せられたものである。徳川の最初に神道が起る時でも、是は譯がやつたかといふと、浪花の契沖といふ坊さんが水戸光圀に招かれて來て開いたのであつて、それから東隱、篤胤などが出たのである。

所が此の神道の四傑と言はれる四人は、神道の方に於ても復古神道派と稱して、是は排斥固陋の癖があるのである。古に戻すといふことは宜いけれども、古を何處に取るかといふと、此の佛教が渡來し支那の文化が來た事を切捨て、モウ一つ前へ戻さうとするから、日本の固有のものは神道だけだといふ事になる。佛教は支那の文明が渡來したのである、佛教は印度の文明が渡來したのであつて、是は他國のものである、日本固有のものは唯初めに有つた所の神道だけであると言つて、天の岩戸の内に逃げ込んで蒙昧未開なる頭腦に復つて行く、これが復古派である。そこで筆を執つたならば佛法の悪口、儒教の悪口をやたらに言ふのである。書いて居る物を見たらわかる、書物は唯一の證據であるから、之に依つて彼等には有罪の宣告を與へて宜い。どういふ事を言つて居るか、儒教に就ては、彼等は、儒教には同姓妻らずといふ事がある、けれども日本の古い所へ行くと叔母さんを嫁にしたり、兄弟が夫婦になつたり、神代にはさういふ事がある。後に於て言へば所論亂倫の事柄がある、草昧の時代には己むを得ない事である。それを儒教の人が人倫を明かにするナンと言ふが、そんな事はいかぬ、人間といふものは氣に入つた者がひつ附いて夫婦になつたら宜い、それを彼れ此れ言ふのは夷狄の教であるといつて、丁度自然主義のやうな事を言つて儒教の悪口を言ふ。その書き方の愚な事といふものは、我國風を決して擁護するものでも發揮するも

のでもない、内輪の耻を丸出しといふものである。それでも「俺は日本人だから日本を最負しななければならぬ」といふやうな馬鹿が寄つて、それを守り立てゝやつて来たものである。

佛教に對してはどうか。佛教が我國に渡來してから人間といふ者は死を恐れなくなつた、人間は永遠の生命があるから、大事の場合には命を捨てゝも構はぬといふ精神を持つやうになつた。所が彼等は「それはいかぬ、人間は命を惜んで、殺すと云つたらブルム、願へるやうにして置かぬとうまく行かぬ」といつて、人間が理想を描いて死を恐れないといふ此の精神を非常に罵倒して居る。それから佛教に於ては殺生を禁ずるといふが、殺生を禁ずるナンといふ事は愚だ、殺生すればこそ豪くなれるのぢやないか、誰もウ殺さなかつたのが水飲百姓ぢや、少しばかり殺したのが足輕ぢや、大分殺したのが武士だ、ズツと殺したのが大名ぢや、一番よけい殺したのが天子様ぢや、斯ういふ馬鹿な事を書いて居る。問題にも何にもならぬ。これは敵を呪ふが爲に書くのであるが、其の裏面から考へたら非常な悪い思想である、國体を破るものである、皇室の仁愛の大御心を壊すところの大きな罪を彼等は考へなかつたのである。それが頭を擡げて來て佛法の悪口を言つたものである。法華經などに就ても平田篤胤が「出定笑語」の中に書いて居る、それは悪口の言ひ放題、法華經には非常に有難いやうな事が書いてあるけれども、それは藥の効能書みたやうなものである、効能ばかり澤山書いて居るけれども、藥が何處に在るやら、開けて見たら藥の中味は抜けてしまつた反古紙みたやうなものぢや、斯ういふ事を書いて居る。自分が宗教の何たるを知らぬものだから、宗教といふものは何か魔法みたやうなものと思つて居る。何處かお經を見て行き居つたならばえらい魔術みたやうな事があるかと思つて讀んで見た所がさうではない、純良なる人間の心得を教へて居る

ものであるから、之を藥の効能書ぢやと言つた、さういふ馬鹿者である。それを今まで學界に於てあまりに尊敬し過ぎて居る。傳教大師や日蓮聖人などよりは、平田篤胤の方が敬神愛國の人であるといふ風に、文部省の役人から大學の先生はじめ、中學校でも小學校でも教へて居る。さういふ間違つた觀念を一掃せざるに於ては、我國文教の正しき方針は確立しないものである。これは何も吾輩が佛教の爲に阿ねつて言ふのではない、日本文教の方針はそんな間違つた學者の説に基くべきものではない。無論佛教の中からも随分頑冥な固陋な者が出て居るけれども、そんな者は用ふべからざるが如くに、儒者や神道の中でもやり損うた奴を手本にすべきものではないのである。

所が明治維新の鴻業は此の二つの思想系統が勢力を得て、各藩の子弟は朱子學に依つて教育せられた者と、それから復古神道の方から來た勤王愛國の精神とが一緒になつて、維新の大業を成し遂げたのである。故に徳川を倒すと同時に佛法を破却しようとした、だから討幕と言へば同時に排佛といふ事を考へて居つた。勤王を唱へれば敬神といふので、維新の際には大分各藩に於ては士族は神道になれといふ事を、君候から命令せられた所がある。九州邊りも段々さういふ所があるでせう、私共の國は播州であるけれども、やはり殿様がさういふ事を言つて、佛法を皆やめさして神道にさしてしまつた。それが今でもズツと残つて居る。役人とか軍人とかいふやうな人に於ても、先祖は何宗であつたけれども維新の際に神道にされてしまひました、今は神道ですが先祖は佛法ですと言ふ人が何萬人でも居る。それは誰がさういふ事をやつたかといふと、今言ふ平田篤胤等の議論に依つて、佛法が非常に悪いものだと思へた結果である。所が之を詮じ詰めて見るといふと、大變な誤解がそこに在るのである。前に言つたやうな下らない間違

いは問題にならぬけれども、十分に研究して佛法を非難攻撃した議論に於ても、主なる點は佛法が人倫を破るといふ事であつたのである。人倫を破却するといふのは、君に忠義を盡し、親に孝行するといふやうな忠孝の倫理を無視して、佛道を修行する者は親を捨て、山の中に入り、國の事など考へて居るものではない、自分一身一個の事を考へて居るものである、家を捨て國を棄て、しまふものである、此の忠孝の倫理を破却する點に於て佛法は邪道である、斯ういふのが儒者の議論である。所が何ぞ知らん、佛教は阿含の始めから涅槃の終りに至るまで、人倫を擁護し人倫を發揮してこそ居れ、親に孝行する必要がないとか國を思ふ必要が無いとかいふやうな事は何處にも説いてない。何を以て彼等はさういふ事を言ふのか、彼等はお經を少しも見ない、唯だ禪宗の坊さんと話をしてみたら所が、禪宗の坊さんが言ふには「世間の事などはどうでも宜い、真如の月を觀なければならぬ」と言ふから、親はどうするのぢやと尋ねた所が「親の事ナンかは考へて居りませぬ」と言ふ、この坊さんも此の坊さんも皆さう云ふから、佛法といふものは人倫を捨てたものだとか考へたといふのである、禪宗坊さんが佛法だと思ふ程彼等は馬鹿である、禪宗坊さんは禪宗坊さんであつて佛法を代表する者ではない。佛法は如何に其點を觀て居るかといふ事は、初めから日蓮聖人のやうな偉い人が出て、禪宗は佛法ではない、彼は即ち非佛法なりと明瞭に説いて居る。それを此の世の事をすつぱり捨て、しまつて、唯真如の月を觀ずらんとばかり上笠かついでフラ／＼歩くやうな事をやる、さういふものは佛法ではない。阿含の教にもその事は非常に小言を言はれて居る、家を捨て國を棄て稼業を捨て、無責任の地位に立つてフラ／＼歩くといふやうな者は都合な者はないといふ事を釋迦如來は盛んに攻撃せられて居る。あの禪宗のやうなやり方といふものは支那で出来たものである。支

那に例の竹林の七賢人といふやうな拗根性の奴が居つて、「どうしたら佛に成れますか」と聞いたたら「佛と言ふことなかれ」——そんな馬鹿な事はよせ、佛が來たならば俺が跋扈してやるといふやうな事を言つて居る、それを大變氣の利いた事のやうに思つたのである。だから本筋の佛法ではない、支那の拗根性の亡國の人達が、自分の醜態を晴らす爲にあんな事を言ふたものである。あんなものが如來の教ではない、一切經の中に就て考へて見れば、佛法は實に醇々として人倫道德を説かれたものである。又淨土宗や眞宗の坊さんに聽いて見ると、此の世の事はどうでも宜い、死んだ先が大事ぢやと言ふ、ごのお寺へ行つて念佛を唱へ居るお婆さんに聽いて見ても、此の世の事はモウ諦めましたと言つて、死んだ先の厭世的の事ばかり言ふて居るから、さうすると人倫といふものは立たぬ、佛法は人倫を破壊するものである。斯ういふので、禪宗の獨善主義と淨土門の厭世主義、大体は此の二つに就て儒者が佛教を攻撃したのである。所が禪宗の獨善主義も淨土宗の厭世主義も本當の佛法ではない、大体さういふ間違ひの起るべきものではないのである。

それならば何故阿彌陀様を念じてどうといふやうな事を釋迦如來が説いたかといへば、それはモウ世の中に居る事の出来ない章提希といふ婦人が、其の子の阿闍世といふ王様の爲に座敷牢に入れられて、如何にしても救ひ出す途がない、王様が親不孝で母親を座敷牢に入れてひばしにしようとして居るのであるから、裁判官を連れて行つても逕査を頼んで行つても救ふ事は出来ない、モウ數日ならずして命の終るといふ人間に對して慰めるのであるから、恰も死刑の宣告を受けて居る囚人に對して最後の教誨を與へるが如きものである。死刑囚に對して、人間といふ者は生きて居る間に大いに働かなければならぬといふやう

な事を言つたならば「私はモウ數日の後に命を失ふてしまひます」と言つて泣くのみであるから、そこで「イヤ人生といふものは世の中に出て憂快なやうでも色々面倒があつて、商賣が儲かるかと思へば又損をするし、自動車に乗つて行くかと思へばバンクもするし、そんなに善いものではない、まア安らかに後生を樂しんだが宜い」といふやうな譯で、活動の社會を否定して未來の安心を與へるといふ事は、死刑囚に對しては今日と雖も尙ほやはり必要がある譯である。だから淨土門一流の説教は、死刑確定の囚人だけに説く事に於ては宜いかも知れぬ、併ながらそんなものを佛法の正面に持つて來るといふ事は間違つて居る。此の議論は動かすことの出来ない最も合理的の議論である、吾輩の今言ふ事が本當である。前後の事情といふものから、さういふ風に説かれる事も釋迦如來の大慈大悲の尊さがそこに輝くのである。それを生きて現社會に活動すべきすべての人にそんな教を與へようとする事は間違も甚しいと言ふべきである。

だからこんなものを儒者が見て佛法だと思つたのは、それは禪宗や淨土の坊主が居つたのが悪いといへば言へるけれども、そんな坊主を見て直ぐ佛法だと思ふといふ位ならば、何の爲に學問をするのじや。佛法を知らうと思つたならば佛陀の聖典七千餘卷は嚴存して、一巻の破本もなくして日本には到る處に傳はつて居る、何故之を披けて見ないのであるか。又その當時の儒者が間違つたと言つた所が、今日の學者や教育者は相當にお經の本も買ひ込んで居るじやないか、澤山そこらに有るお經を披けて見たら宜い、何故それを見ないのであるか。そんな間違つた事を言うた古臭い儒者の精粕をいつ迄も舐つて居る事はないじやないか。忙しくて見る暇がないというならば、見た者の言ふ事を聴いたら宜いぢやないか。何れにしてもその責任を免れる事は出来ない。餘りに今までは考が粗末である、此の大事な人間の精神の奥を支配する宗教、

國家の盛衰に至大なる關係を持つ所の此の精神生活の中軸たるべき事柄を左様に輕卒に考へて居るといふ事は、これは政治家が平凡であるからである、偉人が出たならば必ずや此の問題に注意を拂ふのである。伊藤公が憲法を制定する準備の爲に西洋に行つて色々研究せられた時にも、西洋の學者は注意を與へた、就中スタインといふ碩學が、主に日本の憲法を制定するに就て注意を與へた有力者だといふ事であるが、其のスタイン氏が丸山作樂といふ人に話した事を、丸山氏が書いて居る、それを讀んで見ると、憲法を如何に完全に拵へてもそれは大体は政治經濟等の形を支配する事になつて行くのであるから、此の憲法が思ふやうに行はれたからといつて、それが國家の基礎は確實だとは言へない、どうしても一面に民心を支配する所の教といふものが無ければならぬ、日本では佛法が一番良いと思ふけれども、併し建國以來傳はつて居る神道といふものもあり、儒教もある、佛法も色々分派をして居るから、之を調節して日本の精神支配の教化を布くといふ事は非常な嚴密の研究を要する、さうして將來其の指導方法を誤らぬやうにしないと、如何に憲法を立派にしても精神の内面から日本の國家を危ふする事になるぞといふ事は、スタイン博士が懇々と注意をして居るので、其の事は日本人の主なる人々は皆知つて居る事である。

然るに今日に於て佛法に對する所の研究を坊主に委せて置くといふのは不都合である。法律上の事や政治上の事であつたならば、何でもないちよつとした事でもそれ／＼西洋人を招いて、澤山の金を使つて調査をやつて居るぢやないか。我國の歴史上傳はつた此の大切なる佛法に對して、政府は一錢の金も調査研究の爲に出して居らぬ、政治家として謹んで此の話を聴く爲にやつたといふ事もない、唯各宗派の代表者を集めて辯當でも食はして、宜い加減な事を言つてごまかして居る位のこと、精神的に此の佛法が國

家に直接大關係があるといふ事の自覺を持たないといふのは、是は間違つた事である。今にその失敗に氣づいて後悔する時が来るに違ひない。支那が今日のやうな混亂の状態になつたのも、モウ少し早く支那人の精神を支配する教化を注意したならば、あんな事にはならなかつたのである。政治や法律は表面でどう變化して行つても、此の民心を支配する所の道徳、宗教の根柢が確立さへして居つたならば、憂ふる所はないのである。政治や法律を如何に巧妙に按排して行つても、民心の根柢が道徳、宗教の上に於て確立しなかつたならば、どんな法律を作り、經濟施設を完備しても結局は失敗に終るものである。それが今の日本に歴々と現はれて來て居るのである、今の政府もいろ／＼努力してお居でなつて非常に忙しいやうだけれども、やはり枝葉の事に忙しいのである。普通選舉の區制をどうしようとか、或は財政の緊縮をどうしようとか、何處は幾ら減らしたら宜からうとかいふので算盤をバチ／＼弾いて居る、それは悪い事でもないけれども、算盤ばかり弾いたつてそれでうまく行くものではない、モウ一つ根本の問題に注意しなければならぬ。三日ぐらゐ何もしないで宜いから皆休んで、さうして精神的に覺醒めなければ駄目である。要するに以上申述べた二つの間違ひ、即ち一は西洋の宗教と國家の關係の誤つて居つた事を其の儘日本人が考へて來て居る所の政教關係に就ての誤解と、それから日本に於ての歴史傳統を破つた徳川時代の朱子學及び復古神道の固陋なる思想を承継繼いで居る謬見と、此の二つを根柢から打碎いてモツと正しき自覺に復らざる限りに於ては、日本の思想界は確立しないといふ事を斷言して憚らないのである。

古來の偉人はいつでもその事を明瞭にして居ると思ふ。我國に於ては聖徳太子の如き、これは精神を本として國家の經綸をしなければならぬといふので、十七憲法をお作りになつた。どういふ趣意で作られた

かといへば、政治や法律や經濟はこの時／＼で接排して行つて宜しい、併し萬世に傳はる所の民心を支配する精神の憲法といふものは確立しなければならぬといふので、十七憲法を作られたのである。その中には儒教の精神も、神道の精神も、佛敎の精神も調節せられて十七箇條になつて居るのであるが、特に佛敎に重きを置いてある。第一條には「和を以て貴と爲す」人心が調和しなければいけない、政治の關係で反目したり、經濟の關係で反目して階級の鬭争をやつたり、黨派が分れて喧嘩をしたりするといふのはいかん、小さな利害や事情に依つて民心が分裂するといふ事は一番恐るべき事である。黨派が違はうが職業が違はうがそれは小さな違ひである、日本人であるといふ自覺の上に於ては億兆心を一にして大結合、大調和を何時の時代も忘れぬようにせよといふ事が憲法の第一條である。それが今日忘れられて來て居る、東京の市會でも帝國議會でもガチャ／＼やつて、雪隠蟲の喧嘩のやうな事をやつて居る、西洋の眞似をしてそれが進歩と思つて居る。勞働運動でも激しくやつて、勞働者は何でも突張りさへすればえらいやうに思つて居る。「サク／＼喧嘩をしてもいくまい、成るべく平和に調節を取つて行かんならんぢやないか」と言へば「そんな事は古臭い」といふ、みな煽動で居るのである。國際關係に於ての平和といふ事も、日本が驅されて貶を舐らされて、軍備縮小などやつて居る、平和々々と言つても安心のならんのが國際關係である、その一番安心のならん國際だけ平和の夢を見て、國內に於ては政治の上に於ても經濟の上に於ても喧嘩をやつて行かうといふ程馬鹿な態度を取つて居るのが今日の日本國民である。この憲法に「和を於て貴しと爲す」と第一條に示された事は最も大切な事である。

その次に現れたものが「篤く三寶を敬へ」といふ憲法である。それはどう書かれて居るかと言へば、

篤く三寶を敬へ、三寶とは佛法僧なり。即ち四姓の總歸、萬國の大宗なり。何れの世何れの人か是の若き法を貴ばざらん。人尤悪なるは鮮し、能く教ふれば之れに従ふ。三寶に歸せずんば何を以てか狂れるを直ふせん。

この佛法といふものは如何なる階級の人でも皆歸依をしなければならぬ、四姓と言つて士農工商すべての人が信すべき教である、さうして「萬國の大宗」で、一つ國ばかりではない、如何なる國にも行つて釋迦牟尼の教といふものは全人類の尊敬すべき精神生活の中心に置くべき教である。それ故に何れの世何れの人と雖もこのやうな立派な教を貴はん者のあるべきものではない、人は本當に心から悪いといふ奴は少ないものである。唯だ表面が悪いのであるから、教化さへ怠たらぬやうにすれば、さう世の中が滅茶滅茶になるべきものではない、人間といふものは教を除けば無茶になるけれども、教さへ嚴重に勵行すれば必ず人は善人が多くなるに極つて居る、そこに人類の文明の基礎があるのである。併しこの教を輕んじたら何時でも腐敗墮落する。故にこの佛法に歸依し佛法を尊敬しなかつたならば、間違つて行く人間を直すところの力が無い、唯だ一と通りの道德だの講釋ばかりでは力が無い、三寶に歸依せずんば本當の正しい人間を作ることは出来ないと言かれて居る。

そこで皇室を始めとして政治家が先になつて之をやらなければならぬといふことを聖德太子が極められたから、歴代の天皇は皆非常に深く佛法を御信仰なさつて、さうして皇室にお生れになつた方でも、外のお仕事をなさる御用のないやうな方は、皆坊さんにおなりになつて居るし、陛下も天皇の位をお禪りになると法皇と稱して、袈裟をかけて仙洞御所で佛法を修行なさつたものである。歴代の天皇みなさうである、

皇室に於ては非常に袈裟を御尊敬なさつた、今では袈裟でもかけて電車に乗つて居つたならば「こら、くそ坊主」といふやうな譯であるけれども、昔はお袈裟といふものはみな菊の紋がついて、天子様の御紋と同じ様になつて居つた。紫の衣といふやうな物も、今日見なければ語らぬと思ふけれども、これは堂上に於て天子様のお側に在るところの服装であつて、今日で言へば大禮服である。時代が變化したから今日は徒らに侮辱するのであるけれども、これは皇室が深く尊敬をなさつたその遺物として残つて居る物である。それは時代に依つてどうでも宜い、袈裟を改めて金モールにしようが、メタルにしようが、そんな事は構はぬけれども、我國の歴史に於て之を尊敬をしたといふ事實の象徴として残つて居る。これは聖德太子がこの事をお定めになつたからである。

それから傳教大師、弘法大師が出られる頃に於ては、桓武天皇、嵯峨天皇、歴代の天皇みな佛法を非常に尊信なさつた、それは一と通りのことではない。京都に都をお遷しになるに就ても、皆佛法に準へてやつたものである、五條とか七條とか九條といふやうなことで、皆坊さんの袈裟に準へたのであつて、京都全體が即ち佛法の袈裟の上を歩いて居るのである。「此處が七條か」「此處が五條か」と言つたならば、それに依つて皆佛法の上を歩いて居るといふ自覺を起させるやうに出来て居る。さうして都の東北の一番高い處、比叡山に佛法興隆の延曆寺といふ大伽藍をお建てになつた、その思想はご進も續いて居る。徳川時代になつて神道の方から佛法を破壊しようとする者があつた、それは唯一神道といふので、江戸の古着屋の親爺が大分神道に凝つて、それがあつちに行きこつちに行きして、京都の方に行つて佛法を破壊するところの運動をしようとした。所が京都には澤山のお寺もありえらい坊さんも居るものであるから目的

を達することが出来ない、天海僧正もその時分には京都に居つたので、その古着屋の親爺の古川惟足といふ男であるが、京都から逐ひ拂はれた。そこで又江戸の方に歸つて来て將軍軍の方を取込んで、神佛分隴といふことをやつて佛教を排斥して、丁度明治維新にやつたやうな神道中心の文明にしようと思つて彼是れ運動して居つた。その事が京都に知れたから、天海僧正がその運動をぶち壊す爲めに江戸に乗込んで来たのである。そこで一方に上野に東叡山といふものを造つた、これは京都の叡山に準へて天台の東叡山を造つて天海僧正がそこに居つて、さうして古川惟足の運動を粉碎してしまつた。天海僧正はいろ／＼の事業をやつて居るけれども「俺が一代の功業の中に於て一番大事なのは、この神道が佛法を撲滅せんとした運動を粉碎した事、これが佛法の爲めにも國家の爲めにも天海の貢獻した一番大きな仕事ぢや」といふことを天海僧正みづから書いて居る。

斯くして抑へられた勢力がムク／＼して居つて、明治御一新の時に至つたのである、さうして御一新には手際よく佛法が神道の爲にやられてしまつた。王政維新の政治の關係は復古して結構であつたけれども精神の問題は非常な失態をやつたものである、その累が今日に及んで来た。これは政治上の復古運動の如くに、やはり精神界に於ても完全なる三教鼎立式は協力の文明を作つて、儒教は儒教、佛教は佛教、神道は神道、互に特色を尊敬しつゝ、相協力して、國體をも重んじ、人倫をも尊び、宗教の信仰をも尊重して、それ等の特色を併せて、哲學もあり、宗教もあり、道徳もあり、國體もあり、諄良なる風俗習慣をも養成して、この精神から西洋の文明を取捨接掛して行くといふやうに、もつと堂々として進まなければならなかつたものを、之の肝腎な内輪をぶち壊して於いて、西洋の文明を皮相的に採り用ひたが爲に日本は今日

の状態に成つたのである。今でも未だそれをやり居る、前に申した通りびつこの眞似をするが爲に洋行して居る人が中々多い、歸つて来たら必ずびつこの議論を吐いて居る、諸君が注意して聴いて御覽なさい、「お前も又びつこになつて来たか」といふやうな者が一パイ居る、西洋から戻つて来て言ひ居る人の議論に感心するやうな議論は殆んど無い。「何も西洋といつた所が大した事はない」といふ事を言ひ居る人は偉い人である。何か向ふを褒めようと思つて自分も本當には感心せんけれども、何か無いかといふので、大きな公園があるとか、或は建築がどうかいふやうな皮相の事ばかり言つて居る、その内部に於て西洋の文化が動亂を起しつゝある今日の現状に就ては、譯もそれを正確に評論する人が無い。それは何も態々西洋に行つて見なくても分つて居る、今日西洋から来る思想全體を見れば明かである。今西洋の宗教がどんな工合になつて居るか、宗教としては基礎を失うて信仰が動搖して居る、哲學はどうぢやないか、行詰りになつて懷疑に陥つて居る、倫理はどうかといへば方向が立たぬ、政治も行詰つて居る、國際關係も嘘ばかりついて居る、碌な事は一つもない、見え透いて居るぢやないか。それを唯だ表面を體よく纏繞して居るのである。東京の建築みだやうに表から見ると中々立派な物が出来上つたやうに見えて居るけれども、裏へ廻つたら見られたものではない。表面から見たならば西洋の文明は燦爛たるものであるけれども、文化の基礎をなすべきものは動搖して定つては居ないのである。

そこで偉い人はどうしてもこの國家と佛法のやうな精神と形に就ての事を根本より考へるものだと思ふのであります、然らば佛法それ自身はどんなものかといふ事を一つ考へて見たいと思ふ。私はこの點に於てお釋迦様が一番偉いと思ふ、聖徳太子のさういふお考も、佛法を見て出た事である、聖徳太子の新發

明ではない。釋迦如來が國家と佛法との關係をお考へになつた一番明瞭な先生であると自分は信するの
 あります。能く日蓮主義者が立正安國を唱へる場合に、他宗の坊さんや世間のわからず屋が提燈を叩いて
 「ナニニ佛法といふものは國家などいふ事を言ふべきものではない、佛法は個人の安心立命、自己の幸
 福を祈るべきものではないか、それを日蓮が立正安國ナンといふ俗臭い事を言つたのである、そんな事は
 間違つて居る、佛法には國家も何もあつたものでない、本來無一物、何れの處にか塵芥を惹かんや、喝……
 ……それが佛法の眞理ぢや」斯ういふ事を坊主もいへば世間でも言ふがそれが大間違ひである、佛法を少
 しも研究しない者の言草である。自分がこれから御紹介しようと思ふのは一々一切經の中の典據を擧げて
 申上げるので、そんな出鱈目の事は言はぬ。自分は不十分ながら一大藏經を殆んど全部讀み了つて、單に
 讀んだばかりではない、既に「大藏經要義」としてこの要點に就ての講述も公けにして居るのであるから、
 自分の頭腦の中には色々参考となるものが入つて居る、幾らでもその證據が擧げられるのである。
 釋迦如來は非常に國家と教との關係を強く考へられた。元來釋迦が生れた時分に多くの人相見が釋迦の
 人相を觀て、出家せざれば轉輪聖王とならん、出家すれば佛世尊とならんといふ事を皆申して居る。釋迦
 如來といふ方は半面から見たら一番完全な王様である、一番大きな政治家である、それが形の政治家に終
 らずして精神界の佛如來となつたのである。日本で謂へば聖德太子が一番偉い政治家である、それが單に
 政治だけに満足せずして憲法を作つて精神の文明を開いたのである、本當の偉い政治家といふものは、精
 神界の文明を考へて起つ者でなければ偉い人とは言へない、本當の偉い王様といふ者は、戰爭許りして居
 る獨逸のカイゼルみたやうな者が偉いのではない、釋迦如來のやうに精神の文明を開いて、さうして形に

於ては盛衰興亡があつても、人類の精神界に與へたる我が教化は永遠にその光を失はぬといふ所まで進ん
 だのが本當の偉い王様である。一寸考へて見ても分るでせう、大抵王様とか貴族といふやうな方は、享樂
 の夢を貪るのである、それが悉達太子はあのやうな幸福なる家庭の生活でありながら、迦毘羅衛の王城を
 棄て、最愛の耶輸陀羅姫を棄て、太子の榮冠を抛つて一切衆生の爲に教を立てるに至つたといふ事は、
 各國の皇室に於ても未だ曾て聞かない所の非凡傑出の方である、それから考へても分る。何も物好きに食
 ひはぐれて立ん坊になつたり、坊主になつてぶらついた譯のものではない、さういふ人生の物質的問題
 よりもモツと大事なものがあるといふ事を見定めて爲さつたのである。その教を立てる上には始終一方に
 國家といふ事を考へて居るからして、その教の中には國家の興隆に關して立派な教が澤山あるのである。
 實は今日はその釋迦如來の一切經に現れて居る國家と佛法との關係に就ての根本をお話ししようと思つた
 のであります、餘談で時間が無くなりました、次回に釋迦如來の國と教とに關するお考へを御紹介して、
 これが彼の基督や西洋の法律家などが考へて居るのとは根本から違ふ、東洋人には斯ういふ大きな問題に
 就ては偉い人が早く出て居る、西洋は今尙ほ偉い人が出ない、昔は尙ほあかんである、基督などが教を
 立てる時分の貧弱固陋な頭腦と、釋迦如來が教を立てられる時分の御考へといふものは實に天地の相違が
 あるといふ事を明かにした、日本人は亞細亞に復り、東洋に復り、日本文化の眞價値を認めて、西洋の口
 眞似ばかりする事は斷然廢めなければならぬといふ自分の信念を併せて申上げて見たいと思ひます。

此の講演の續きが一月號に掲載した「國と人と教」なんです。順序は轉留しましたが、餘りに新年號にほしい玉稿だったので、
 變則を取つて置きました、御諒承下さい。

價值見直し時代の時代

文學士 武田 顯龍

四、恩を仇の時代

ヘンリー・ダンダイタが十九世紀末の時代の思想を批評して、當代は物の方面からは科學の時代であり、思想方面では疑問の時代であり、政治方面ではアモクラツシイの時代であり、商業方面では廣告の時代であり、醫學の方からはヒステリーの時代であると云つた。誠に此の言葉は現代を評し得て又妙なりと云ふべきである。

何が何を何の間に對して新しくあるべきであると結論するは、哲學宗教倫理の方式であり何故にの間に對して新しくありと結論して回答を繰り返し、細より徹を穿つもの科學の方式である。従つて科學の發達は何故にの運發に俟たなければならぬ、科學の全盛は側面より見れば何故にと云ふ問ひの連發時代であると見ることが出来る、即ち科學全盛の現代は思考の出發點が何故にと云ふ疑問に初まり、共に對する結論に對しては直に何故に

と云ふ疑問を裏付けるから、現代は思想の方面から見て疑問に終始して時代だと見て逃りなからう。

科學の發達は横に距離の短縮を計つたばかりでなく、縦に距離の短縮を計つた。即ち五千年の人類發達史を一巻のフィルムに収めて三十分か一時間の間に恰も其の時代時代を見るが如く活動寫眞として吾人の眼前に展開させるばかりでなく、上中下階級觀念に依つて組み立てられた身分本位の社會組織を改めて階級撤廢國民平等の人間本位の社會組織とした。

科學の發達機械の發明、機械の運用、産業の統制、生産の原動力、總ては人間の有形無形の力に俟たなければならぬのであつて、文明の進歩は實に人間の力の所産である。神の力、自分の力は此れを仕進ぐるには三文の働かして居らない、科學は人間力萬能を強く意識させるものであつて、實に人間力發達の

イデオロギイと云ふ件案につれて、文化生活を標準とする生活權の要求と云ふ課題を、上場したのである。

斯くて彼等の臺詞には、凡そ地球上に生れ出でた人間は、強弱廢疾の如何を問はず、生あるものは必ず生存の權利がある。然も社會は連帶責任であつて、善惡正邪共に其の社會構成員の各員が等しく負ふべきものであるから一人のみ幸福に文化の恩澤を恣にするべきにあらず、各人が平等に恩澤を味ふべきであつて強者は義務として弱者を助け、以て其の社會の發達進化を計るべく、弱者は強者に對して助けよと要求する權利を有つて居ることを主張するのである。強者が弱者を助けて、我れ世に勝つてりと云つた様な、優越感に没つて自個満足自個讚美をやるならば、其は社會人道の公敵であるとなすのであつて、昔から云ふ慈悲の如きは此の點に於て弱者には卑屈の道德を強ひ、強者には優越感情を享樂せしめるものであつて、許すべからざる不道德である、とするのであつて、即ち恩を仇に見直しの時代である。

新しく主張して彼等は佛教が慈悲を説くのを以て、卑屈の道德を教ゆるものだとして批評して

パイプルである。

力を本位として人間社會を眺めた時、其處には身分も階級もあるべきものではないと云ふ結論に達する。即ち科學の全盛は上中下階級の身分本位の社會組織を、力と云ふ一水平線の社會組織に改めたのであつて、社會組織上縦の距離を短縮したのである。是が政治上に表はれる時、身分本位に依つて權利義務に相違あることを否定して、權利義務に於て平等を主張する人間本位の民主主義となることは、當然迫るべき道を辿つたと云つて其がらう。

科學發達の結果は地上には自動車が発音をたてて居る、空には飛行機が鋭き音響で唸つて居る、町には工場が騒音耳を聳するばかりである、汽笛の聲は聞へる、警報其者であつた天地は俄然として騒然たる巷と化した、我等の神經は異常に突らざるを得ない。

地球上の出來事は細大漏さず涯から涯へと知れ渡る。自衛の爲に神經は突つて來る、功名心は燃へて來る。町を歩けば電車あり、自動車あり、自轉車あり、馬車の馳るあり、行路の人の神經は甚しく緊張せざるを得ない。距離は短縮された、交通は廣まされた、人

居るが、是は全然彼等の不學の致す處である。凡そ愛情は自個の擴大種族の保存と云ふことから、夫婦間異性間の愛情となり、親子叔姪の愛情となり、血族間に於ける至淳の情が愛情となり、是が次第に擴大して、部族愛情民族相愛同胞相愛人類相愛と發達して來つたもので、色慾が理屈で出來ないと同様、同胞相愛を權利義務と云ふ乾からびた理屈で裏書きすべきではない。彼等は同胞相愛は何れにもするがよい。我等は社會連帶の上より相互扶助を權利義務に依つて裏付けようとするのである、と云ふのであらう。然し相互扶助を權利義務に依つて裏付け、一片の法令に依つて定めたとするも左様な場合に重き責任を果すべく優越感情を全然排斥しながら、自個の生れながらに有する能力を、十全に發揮するものがあるか、どうか、發揮するものありとせば、其の人の思考中には、同胞相愛、又は優越感情の混入し居ることは、常識的に見易いことである。又能力を充分に發揮して居るか居ないか、人間能力の測定は今日の處至難である。要するに彼等の議論の根據は人間の眞骨頭に徹せざる

机上の論である。

の張り見る機會は非常に多い、我が振り見れば、みすばらしい。慈は自然と成られる。然れども力と云ふ平等な水平線上に立つて見れば彼何人ぞ、我何人ぞ、共に平等なる人間である。然るに彼は美しく幸福そうに見え、我はみすばらしく、哀れな姿である。新しく思ひ來たる時神經は刺々せざるを得ない。何とがして人と同様、又はより以上に幸福を享樂したいが力は足りない。平等の考は我にあるも、彼は依然として強者である。自暴と不満とに繼りなされた悶々の情は腹に込み上げて來る。是れ現代人の等しく慥く悲哀である。

己を狂げて強者の前に拜跪して憐みを乞はんか、平等の考は裏切られる。意地を通して平等の考を貫かんか、望む幸福は得らるべくもない。右せんか、左せんか、進退谷まればり

と云ふ懸境場は現代人の等しく演ずる悲劇である。

人は云ふ、大なる悲観は大なる樂觀に一致すると。又云ふ、物窮すれば通ずと。進退谷まつて悲哀の極に達した現代人は、窮境を脱すべく、人道主義に根據を置く生存權の要求に、其の道路を見出したのである。悲劇演舞の身仕度を改めて、社會運帶社會共同責任ッ

佛教徒真に信仰に眼醒めたる日蓮主義徒は善行を爲した時、又慈善を行つた時、即ち貧者身下の者を導き助けた時の感じは、誠に善根を積むことが出来て有難いと云ふ、即ち有難いと云ふ感じであつて優越感の如きは更でない。日蓮主義徒の信仰に於ては慈悲と憐憐とは一枚の紙の両面の如く、不可離の關係をなして居る。慈悲の修行に依つて憐憐の心を養ひ、憐憐の心に依つて慈悲の心を發動せしめると云ふ風になつて居る。更に進んで慈悲を説くに當つても佛教に於ては同事を説き、和光同塵を説き、自らを貧者窮者の立場に置き、其の中に入り群に投じて指導救済すべく高い所からお出でしをやつては駄目である

と云ふのである。壽量品の本佛は無始の音より永劫の末に至る迄、常住の覺者であつて、微妙淨相三十二を具し、八十種の妙姿を持つて居られたが、衆生を救済するには人間と苦を同じくし、人間の生活を嘗み、人間の群に投じて説法教化せられたので、和光同塵と云ひ應現とも云ふのである。八萬億土の先の方でお出でしと手招きする様な生温いことな

の御跡を慕ひ、是を手本とするのであつて、其の間に些の優越感情を伴はないのである。佛が衆生救済に當つて我は世道者開道者説道者なりと權威を以て望まれた點、御經には多々あるも、是は佛が御自らの使命と立場を我々に御示し下さる者であつて、卑しき優越感に没るのと同視すべきではないのである。

次に親子の關係に於ても、價值を見直して恩を仇へと云ふ時代である。唯物主義的に親子の情を見る人は斯ふ云ふのである。即ち凡そ人には種族保存の欲望があるが、是が衝動となつて男女間の欲動となり、そして自然と子供が出来る。斯ふして親と云ひ子と云ふ關係を生じて来るが、親は種族保存の唯一要因として、生れた子供を見た時非常に可愛いのである。其の愛情は殆ど盲目的であつて、己が眼の中へも入れられぬまじき程である。然し子供を育てるには幾多の困難があり、非常の努力と苦痛とを伴ふが、其努力と苦痛は、可愛いと云ふ感情に附隨して居る愉快に依つて打ち消され、苦痛を苦痛とも感じないのである。親は小兒が玩具を弄ぶ様に子供を弄び、可愛がつて非常に愉快を感じるのである。小

子供に對する愛情を失ふわけがなく、子供に對しては其の子の命の

あらん限り、己が壽命のあらん限り、愛して止まないのが親の至情である。

子供の爲に己が命を捨てて顧みないと云ふのが親の情であつて、此の意味から親の恩は海よりも深く山よりも高きものである。佛敎は佛の恩を親の恩に比し、親の恩の實に廣大なるを歌じて、父母孝養の尊きを教へ、日蓮聖人は母の恩珠に譬るに云ひて、道德の中では孝養父母第一なりと云はれ、法華經は内典の孝經なりと云はれ、孝養に三種あり、衣食を施すを下品とし、父母の心を安するを中品とし、功徳を廻向するを上品となす云はれて、法華經の功徳、正しき教を護持し、人類に光宅を與へ、正義善根の功徳を、父母に廻向するを以て最も優れる孝養として居る。此の意味からすれば父母なき後にも上品の功徳廻向の孝養が出来る譯である。

誠の心は誠を以て迎ふべきである、至淳の情は至淳の情を以て迎ふべきであつて、至誠は至淳は權利義務の埒外に在る。親子相愛の情は自然の流露であつて、至誠の淳なるものは權利義務の範疇内に容れんとするは至誠に

對する冒瀆である。

親が子供に對して孝行せよと要求し、更に汝を育てたる故、老後の我を扶養せよ我に是を求めると權利があり、汝には是を遂行する義務がある。親が要求するならば、其の親は自個の至誠に對して、自瀆行爲をなすつのである。

親は扶養孝行を要求すべきものでなく、子は要求されずともすべきもので、其處に親子の至情が存在するのである。狭く眼に口程の物を云はすべきであつて、私しやあなたに惚れまじたと飛び付き食ひつくべきものではない。前者は優にやさしく上品な戀心を聯想させ、後者は野卑な劣欲を聯想させる。前者が至淳であれば、後者は不淳である。親子の間に不淳は禁物である。

人或は親親ならずと雖も子は子ならざるべからずと説くが、親にして親ならずる親とは何の謂ひか、私は了解に苦しむのである。親は子を産んだと云ふことで、親たるの第一條件は具備した。第二には有形に無形に子を愛するに云ふことであるが、精神的に充分子供を愛して居ても、境遇の然らしむる爲に充分子を愛すること、形の上に表現出来ないで

は歩み出したからとて、親夫婦が其を見てあやかしながら悦に入つて居る様は、譬へば無量の幸福を享樂して居る様に見へる。

此の幸福の享樂と、育てる苦痛努力とは、差し引き勘定をすれば残る處は零である。従つて子は親に育てられながら支拂ふべきを支拂ふて居るのだから、別に何等負ふ處はないのである。

然るに親が子供に孝行せよと云ふのは一枚の手に對して、二重拂ひを要求すると同一であつて、親は子供に孝行せよと求むる權利もなく、子供は親に孝行せねばならぬと云ふ義務も負ふては居らぬと斯ふ云ふのである。親が子供を産むこと、即ち人間が親と呼ばれ、子と産る根本欲動に、種族保存を云ふ觀念が媒介となる事は安當であらう。然し親は子供が成人したからと云つて、子供に對する愛情を全然失ふものではない。子供が夫婦關係を結び、親に對する情が薄らぎ、夫婦間の情に濃きを加へた時、親は一種淋しみの悲哀を感じるが、是が必しも苦痛と幸福との差し引き勘定を裏付けるものではない。又孫が出来た時、親は子供にも優つて孫を受するかの如く見へるが、是も種族保存の欲望が

子を反對に苦める場合もあらう。境遇は真く子供を愛する事が形の上に表現し得、教育し得る様な立場に自個を置き得るにも拘らず、飲酒其の他の貧乏の原因の爲に愛の表現が出来ない場合があらう。其れは親にして親たらざるにあらすして、人にして眞の人に眼醒めて居らないのである。親たるの資格に於ては動物も人間も大した相違はない。唯、人なり人たらざるの點に於て動物とは大なる相違を來たす、従つて私は親親ならずと雖もと云ふ此の意識の表現法を適に認容する譯には行かない。

又眞に眼醒めたる人間であつて、然も親親ならずと云ふ親に、子は子たらざるべからずと云ふならば、其が佛敎の教にせよ、佛敎の教にせよ、左様な片務的道德を道徳として認容することは、私の耐え得ざる處である。

法華經要文講義

本 多 日 生

一五四、是の故に汝等、如來の滅後に於て、當に一心に受持し讀誦し解説し書寫して説の如く修行すべし、所在の國土に若は受持し讀誦し書寫して説の如く修行し、若は經卷所住の處、若は園の中に於ても、若は林の中に於ても、若は樹の下に於ても、若は僧坊に於ても、若は白衣の舎にても、若は殿堂に在つても、若は山谷曠野にても、是の中に皆塔を起て供養すべし、所以は何ん、當に知るべし、是の處は即ち是れ

道場なり、諸佛此に於て阿耨多羅三藐三菩提を得、諸佛此に於て法輪を轉じ諸佛此に於て般涅槃したまふ。

この所は五種に修行を明したのであつて、如來の滅後に於てこの法華經を一心に(一)受持し(二)讀(三)誦し、(四)解説し、(五)書寫する、これが五種の修行である。讀と誦の違ひは文を見て讀むと、暗で讀むとの違ひである。受持といふ事は元はお經を覺える事を言つたけれども、段々意義が進んで教の精神を信する事を受といひ、その信念を持續する所持といふ事になつて居る、信念即受持と申して居るのであります。一切經に廣く使はれて居るのは、先

になつて行くとも、どうしてもこの壽量品の本佛の事を意識しなければ妙法蓮華經といふものは成立たぬ。開目鈔に「發迹顯本せざれば實の一念三千も顯れず、二乗作佛も定らず」と言はれたのは、發迹顯本の一事即ち佛陀論の眞實に依つて、一念三千といふ宇宙間の事もさまるのであるし、二乗作佛の佛性論もさまるのであるから、壽量顯本の大事を逸したならば、一念三千も顯れず二乗作佛も定らず、三つの大教義が一度に壞れてしまふといふ事を説いたのが開目鈔の心髓である。それが判らぬやうでは逆も日蓮教學を宣傳する資格は無いのである、「發迹顯本せざれば實の一念三千も顯れず、二乗作佛も定らず」といふ聖訓に就て何等の研究も觀察も意見も有たないで、ボカンとして居るといふやうな者は、語るに足らぬ所の者である、そんな者の意見を聴く必要は無い。この點は充分明かにしなければ日蓮教學は危いものになると思ふのであります、唯だ文學神學論の

生からお經を習ふといふのが受であつて、覺えてしまつて忘れんやうにするが持といふ事である。それから文を見て讀む讀、暗で誦む誦、それからそのお經を説き、寫すといふ事、皆このお經に就ての修行であるけれども、日蓮聖人はこの意義を段々進めて、「受持とは信念なり」といふ事に仰しやつて居るのであります。この妙法蓮華經には出て居りませんけれども、「正法華經」の方には「受持は經要」と説いてあります。その事を茲に擧げて、經の要を段々に推して行けば、妙法蓮華經の五字がお經の精神を抑へたものであるからして、色々尊い文はあるけれどもその文の中に於て經の表題が一番經要を適當に抑へたことになりすから、そこで「一心に經要を受持す」「受持とは信念なり」といふことになる、南無妙法蓮華經と信念するといふことにもなる。これともその經要の表題は南無妙法蓮華經であるが、その因果といふものは佛性論と佛陀論であるといふこと

三三

やうな事を言つて居つては、將來の宗教として到底生命のあるべき筈はない、日蓮本佛論の如きも、宗教の本義から見ては根本的考察を逸して居るもので日蓮聖人が絶対の意義に於てどういふものぢやといふことを考へない、唯だ「末法の導師」といふやうなことから「本佛ぢや」と言つて居る、それは抑々本佛といふことの根本の觀察が立たぬ譯である、本佛といふは絶対無上の一切を包括する所のもので、所謂普遍妥當性を有つて居なければならぬ、時間を貫き空間に亘つて一切の中心、根本であるといふことになければ、本佛といふやうなことは言ひ得られないことである、「二切衆生」に佛性があり本覺があるから本佛ぢや」といふやうな事は、宗教の信仰を論ずる場合の問題ではないのであります。

何れにしても左様な譯であるから、茲では經要といふことを能く考へて、さうしてその經要は開目鈔の上巻の結文の所に在る通り、法華經の具足道とい

ふは何かといへば、二乗作佛と久遠實成の二大教義である。その大事を受持して行かなければならぬ。であるから之を不輕品のやうに考へれば佛性の覺醒運動であり、善量品に依つて考へれば本佛に對する渴仰の信念であつて、この二つは矛盾ではなくして兩方とも忘れないやうにしなければならぬ、下に自己を反省した時には佛性の自覺、佛子の自覺を起して菩薩行の誓ひを立て、進んで行かなければならぬ上に仰いだ時には本佛の大慈悲に感激しなければならぬ、それは矛盾ではない、その二つがあつてこそ始めてそこに感應が起り、信行が立つのである。上に本佛を認めても佛性の自覺を有たぬものは、法華經の完全なる信仰ではない、下に佛性を認めても上には本佛を認めない者は、是れ亦完全な信仰ではない、そんな事も最早や極りきつたことで、一方づつやつて引つかゝるやうな馬鹿氣たことは無い譯である。丁度日本の國體に就て考へても、下には大和民族の

特色、國民精神の偉大なる所を研究して、益々これを發揚發揮しなければならぬ、上には國體の尊嚴、皇室の稜威を明かにして尊崇信賴して行かなければならぬ、これが兩々相結んでそこに大和魂も説明され、國體も説明されるのである。之を切り離しては判らんやうでは、國體の研究といふことにならぬ、それと同じ事である。法華經を唯だ自己だけで説明したりするやうなことは、洵に無學の者が多かつた爲に左様なことになつたのである。

そこでこの五種の修行をする場合には、何處でも宜しい、經卷所住の處でも、國の中でも、林の中でも何處でも塔を起して供養して宜しい、それは其處が即道場であつて、其處に於て諸佛は菩提を得、法輪を轉じ、且つ涅槃したのである。茲には成道、轉法輪、涅槃の三つの靈地が擧つて居るが、誕生の靈地が擧つて居ない、これはそれを加へて考へても

宜いのである。これは釋尊一代の靈跡參拜の精神が一時非常に強くあつて、釋尊は迦毘羅衛城に降誕し伽耶城に成道し、靈鷲山に說法し、雙林拘尸那城に入涅槃を爲さつた、雙林の靈地、靈山の靈地、伽耶の靈地、迦毘羅衛の靈地といふものを皆巡拜して居つた譯である、けれども法華經はさういふ靈跡參拜をしないで宜い、何處でも世界中到處、己れが法華經を信心する處が即道場であつて、其處に佛は來臨影響し給ふものであるから、靈跡巡拜のやうなことに氣を奪られる必要は無いといふ意味を説いたのであります。これも非常に高い思想で、單に靈跡巡拜のことはかりではない、今日は無闇に文字の本尊でなければならぬとかいふやうな議論もある、けれどもさういふ事もこの精神を以て考へて見るといふと餘り因はれ過ぎて居る、無論曼荼羅本尊を安置するのは結構であるけれども、併ながら言葉で以て勸諭しても足りるのである。日蓮聖人は餘所に行か

れるのに本尊を携帶して行つたといふことはない、如何なる處に於て、其處に文字の本尊がなく、木像の本尊が無くとも「謹んで勸請し奉る本門壽量の本尊、南無久遠實成無量阿彌陀佛」と申上げれば來臨影壽し給ふといふのである、さういふ事も語り實在の意識に依つて行かなければならぬのである。日蓮聖人は曼荼羅をお書きになつたけれどもそのお書きになつた曼荼羅が一番有難いといふ意味ではない、實在の意義が有難いのである、唯だ形式のみで内容が無く、實在がなかつたならば駄目である、本尊の寫象式のみであつて、實質の意義が明かならなかつたならば、それは將來の宗教としては役に立たぬ者である。姉崎博士などは、その點に於て日蓮主義の前途を危んで居らるゝと聞いたけれども、それは餘りに寫象式の本尊に、泥する議論が多い、それが又當然かの如くに思つて、姉崎博士が危んだのだらうと思ふ。法華經の精神や日蓮聖人の精

神はさういふものではない、それは一般信仰の上には有相行であるから、之を字に書き木像に現はす方が信仰が仕易いので、さうしたのである、それを基督教のやうに偶像排斥はしないけれども、併し實在の意識は法華經に於て頗る明かである、壽量品の如きは全部それである、「近しと雖も而も見えざらしむ」と言ひ、「常に此に在つて滅せず」と説かれて居る。日蓮聖人の開目鈔の御題目でも、皆この實在の意識を明かにしてあるのである、さうして聖人の信仰意識は「暮れ行く空の雲の色、有明がたの月の光までも心を催す思ひなり」と説かれて、實在の意識を説くこと實に明かである。又「この經を信する人の前には、滅後たりと雖も佛在世なり」と言ひ、或は壽量品を解釋して「時々刻々、年々に我れ死せざる由を知らしむ」——壽量品はその要諦を言へば、釋尊は何時でも此處に生きて居る、何時でも汝の前に居るぞといふことであるまで仰しやつて居る、

であるからこの意義を充分に考へて置かなければならぬ、さういつたからと言つて、木像が邪魔になるとか、文字の本尊がいかぬとか、さう直きに極端なことを考へるからいかぬ、それは人間の生活といふものは、さういふ風に本尊を安置することの出来る場合もあるし、又茲にある通り樹の下或は山谷、曠野を旅行して居つて、佛像を捧げて行くことも出来ない場合もある、さういふ場合にはその實在の意識に依つて之を信じさへすれば事足りるのである、一つを取つて一つを捨てよといふのは愚な事である、一人の人間でも家に居て佛像を安置して修行することの出来ることもあり、旅行して居つて本尊を携帶の出来る場合もある譯であるし、又この複雑なる世の中に於ては、或は學生の生活をやるやうな者は、寄宿舎などに本尊を安置しやうと思つても安置出来ない場合がある、或は又出征軍人が戰場に本尊を携帶の出来る場合もある、色々の事情があるのである

からして、そこを能く考へて行かなければならぬ。それはどちらが重いかといへば、どうしても實在の意識を明かにして行くやうに導いて行くことが大事である。さうして日蓮聖人の曼荼羅圖の尊さも相當には説くが宜いけれども、それはかりやかましく言うて、實在の意識が枯れて來るやうなことは、大いに考へなければならぬのである、その誤を諷めるにはこの神力品の「即是道場」の經文が最も宜しい譯であります。今一つは法師品の「復舍利を安置することを須ひす——この中に已に如來の全身あり」と説かれた所のあの經文であります、又壽量品全體の意味も皆さうであります。

一五五、如來の滅後に於て、佛の所説の經の因縁及び次第を知つて義に隨つて實の如く説かん、日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人間に

行じて能く衆生の闇を滅し、無量の菩薩を教へて、畢竟して一乘に住せしめん、是の故に智有らん者、此の功德の利を聞いて、我、滅度の後に於て應に斯の經を受持すべし、是の人佛道に於て決定して疑有ること無けん。

この所は上行菩薩にこの經を付囑するに方つて、釋尊が獎勵の言葉を説かれたのであります。今別付囑する本化上行等のこの菩薩は、如來の滅後に於て佛の所説の經の因縁及び次第を知つて、義に隨つて實の如く説く人である、「所説の經の因縁」といふのは一切經、必ず因縁があつて起つて居るのである、阿彌陀經はさうして起つたかといへば、韋提希夫人がその子の阿闍世王の爲に座敷牢に入れられて苦しめられて居る所から起つたとか、ごのお經はどういふ事から起つたといふやうに、お經に依つて現はれ

る所の來歴關係といふものがある、それがお經に依つては大して重大でない因縁もあるし、法華經のやうに一代の教義を結束して最高の眞實を現はさんとする所の大因縁もある譯であるから、その小因縁、大因縁を悉く明かにし、又この教を説かれた順序次第といふものがある、それを簡單に言へば五つの次第で、華嚴、阿含、方等、般若、法華涅槃であるけれども、細かく言へばその次第といふことはいろいろある譯だと思ふ。大きく別けるから權實二經であるけれども、權の中にも又いろいろの別け方が要る譯である。その事は今後大いに研究しなければいかぬ、天台、日蓮の言はれたが如くに次第因縁がある、その次第因縁といふやうな事はモウ一層今日は明かにしなければならぬ、大體先師に依つて示されて居るけれども、まだ、佛敎はズツと能く整頓しなければいかんと私は考へて居る。それは本化の菩薩が下られて大體綱格をお示し下さつて、さうして法華

經の眞實義に依つてお説き下されたから、始めて佛敎の紛亂が解決される譯である、恰も日月出で、世の闇を除くが如くに、この本化の菩薩が出現して人の心の闇、殊に宗教に關する迷ひ、深い思想の問題について、闇を照すのである、闇といつても一通りの解釋も出来る、唯だ通常の酒に酔つて居るとか、物質の迷ひといふことも闇であるけれども、併し又殆ど神秘かの如く思ふところの深い思想の問題に就て上行菩薩はその闇を照すのである。であるから詰り思想善導の菩薩である、末法に至つて思想言論の紛糾錯雜を極むる時に出で、快刀亂麻を斷つ所の任務を帯びて出る者である、これを今茲に仰しやるのであります。

それ故にその菩薩は最後には「無量の菩薩を教へて」——斯ういふ場合の菩薩といふのは一切衆生を指すのであります。法華經から言へば總て佛性を有つて、往いては菩薩行に進むべきものなるが故に

一切衆生を讚歎して無量の菩薩と言つて居る、その無量の菩薩を教へて畢竟して一乘に住せしむる、最初は開ひであるけれども結局は一乘の大思想に安住せしむる所の働きをなさるのであります。「一乘」といふことは種々の義を含んで居りますけれども、これは一切の思想、教學を適當に調節し統一して、採るべきを取り、棄つべきを捨て、疏通すべきを疏通して、渾然として一なる所の大文明を造り上げるのが一乘に住せしむるといふ事である、日蓮聖人の安國論に「信仰の寸心を改めて實乘の一善に歸せよ」と言はれたのはそれである、いろいろの信仰思想といふものがある、それは一部分一部分抑へて見れば一概に悪い事でないかも知らんけれども、それは小さく引つかつて居るのであるから、法華經のこの大思想に來つてそこに統一を教へなければならぬ。如説修行抄にも「諸乘一佛乘に歸して吹く風條を鳴らさず」と言はれた、今のやうに思想が小さく分

裂して闘つて居るのは、丁度戦國時代のやうなもので、日本でも元龜天正の時には群雄が割拠して天下を争つて居つたが、遂に明治の維新に依つて天皇に統一せられて始めて日本の剛がそこに發達を遂ぐるに至つたやうなもので、丁度今は思想界の元龜天正時代みたやうなものである、語らない事を以て一塵えらいやうな積りで、其處に據を構へて覇を争はんとするやうなことは、愚にもつかぬことである、この思想の群雄を或は折伏し或は開導し、最後統一して、さうして日本の思想界を纏め、往いては全世界にまで向つて一乘の教を宣傳せられる所の菩薩であるといふので、その事を釋迦如來がお譽めになつたのであります。

それ故に「智有らん者、此の功德の利を聞いて」——この法華經を中心にして一切の思想が纏まり、一切の者が闇を降かれるといふ結構な教だといふことが判つたならば、我が滅後に於て必ずこの法華經

据えても多少の効果はあるか知らんけれども、やはり灸の据え所といふものを抑へて据えないと、無闇に熱い目をするばかりで餘り効果は無い、「宇宙はみな真理ぢや」といふやうな漠然たることをいふのはそれは灸の穴を得ざるが如きものぢやと言ふので、モウ極つた事である、それだから唯だ漠然として諸法は實相ぢやとか、これが妙法ぢやとかいふやうな事を言つて居るのは、天台すら採らない所である、それを段々要路を抑へて來たものが教學の上にそんな逆轉するといふことは有るべき事ではない。「是人佛道に於て決定して疑有ること無けん」——斯様に於て法の經要を見、唱へ言葉としては妙法蓮華經、内容としては佛性と本佛との事を明かにして、そこに信念並に行を起して、行は少くとも菩薩行の一部分に進んで、さうして法華經宣傳の事に努力する人でなければならぬことも必然に考へなければならぬので、法華行者といふものは唯だ獨善主義であ

を受持しなければならぬ、これも廣く言へば法華經宣傳であるし、纏めて言へば經要である、經要を受持するといふことは南無妙法蓮華經を信することである、その南無妙法蓮華經の内容は必ず佛性と本佛との二大教義を述することは出来ない、唯だ漠然たる宇宙觀のやうに妙法を解釋して「妙法とは真理ぢや」とか「諸法實相ぢや」とか言つても、實相の内容が佛性論と本佛論に進まなければ、法華經の義門をなさん譯である、今のやうな幼稚な實相論に止つてはいかぬ、妙法を言へば必ず佛性と本佛とを考へなければいかぬ、天台すらもその事をやかましく言つて居る、宇宙全體が妙法と言つたんでは、抑へどころがないから、そこで一念三千といふ事を言つたのである、一念といふのは心法——衆生の心から考へなければならぬ、一色一香みな中道ならざるはないけれども、さういふ廣いものでは用をなさないから、灸の穴を得るが如しと言つて、お灸は何處に

つてはならぬから、社會の爲、國家の爲、人々の爲といふ所謂菩薩比丘であり、在家菩薩でなくてはならぬ。それはモウ必ず要求する點である、左様にして行くならば、その人は佛に成ることは心配せんでも宜しい、必ずや成佛出来るものぢやといふ事を佛がお許しをなさつたので、之を佛の允可と申す、允可といふことはお許しといふ事である、允可決定信するといふ事を證明を與へられた譯であります。斯様にして神力品は上行菩薩に對する別付觸と、それから即是道場の事と、それから上行の出現の場合に於て「畢竟して一乘に住せしむる」といふ上行菩薩の任務を明かにして、この品は終つて居るのであります。

大僧正本多日生著

総合的佛教觀

◆四六版 金壹圓五拾錢 送 拾五錢 全一冊

著者多年大藏經全部を精研し、曾て大藏經要義を撰述し、今復此著あり、各宗の葛藤を斷破して大藏經に直面し、華嚴、阿含、方等、般若、法華、の五大部を講明し、善く佛教の眞面目を發揮し、其の綜合的飯趣を示す、行文流暢何人も領解し得べし、佛教の書籍多しと雖も、未だ曾て此種の著書あらず、今や日本國民は其使命を自覺し、東洋の文明に歸らざるべからず、此時此著あり、此書讀まるべからず。

大僧正本多日生師著

うるの奥山今日こえて

一部定價金貳拾錢 郵税金貳錢 施本用特價拾部金壹圓貳拾錢(送料共)

いろは四十八文字、そこに如何の宗教を藏し、そこに如何の哲學を含める、如來一代五十年の設化八萬四千の法門は、簡約せられて四十八文字に有り、東洋六千年の文化は醇醪せられていろは歌に存す。本書は宗教界の權威本多日生師によつて、眞の人間觀、眞の生死觀、眞の解脱、眞の信仰、眞の道德を講説せられたるもの、釋尊の教に依つて光あり力ある人生の行路を進まんとする者は、必ず精讀せよ。第十二版印刷發行

發行所

統一編輯局

名古屋市東區田代町城山

電話 東五四八七番 振替 名古屋一〇八一九番

罷睡錄

(其六)

黃薇菴青村

來臨と資産系始め親戚一同、くささ出迎へ

た。

出迎へられた直記君は授けの場所へ通つて

見ると娘は中々の別嬪だ、开處で侍人が「如

何でせう、お氣に召しましたか」と怒る、

内意を聞くと、「結構だ」と云つたので、先づ

安心と侍人は真由主人に通じて買くと开處

へ主人の番頭が出て「誠に不束な娘では

座いますが、お買ひ下さいますに就ては眞毒

踏込もか、ります次第、つきましては侍

で二十萬圓銀につけて差上りますれば宜敷お

願ひ申します」と當世流に碎けて出たはまか

つたが、一方は流石に觀舟、先生の血を察け

た男だけに、それがどうも氣にくわいな、何

千金を突れると勃然として「馬鹿な事を云ふ

ものだ、俺は娘を買ふと云つた丈で金を買ふ

十一、流石は鐵舟の件

山岡鐵舟先生を崇拜して居た或地方の

資産家が、其娘を先生の干息直記君に買つ

て呉れ申込んだ、直記君は買つてもよいが

兎に角見合ひの上と云ふ回答をした、すると

先方では天にでも上つた様に喜んで、娘の

衣裳に何萬と云ふ大金を抛ち、上野伊藤紋で

待受けて居た。さて當日直記君の服装は

見れば、眞國本橋の紋服に小倉袴と云ふ出

立ちで、大殺しながらの洋杖を振廻しながら

ら、飄々然として伊藤紋の式臺に案内を乞

ふた。すると取次に出た女中が直記君の姿

を見て、ぐつと言葉もぞんぞいに「何用か」

と突つ立たま、の挨拶に「此處に何某と云ふ

者が来て居るか」「お前さんは山岡だと云ふ

ので兎も角お客に取次ぐと、それ婚約の件

あの子に、同居料五十萬圓全部をやると、貴嬢の親孝行にほれ込んで居らつしやるのよ、美ちゃん、嫁なの」「小母さん、美嬢、同居さんて方は何年何歳」「たしか六十二三と思ふが、それとも五かな六かな」「小母さんそれなら、私行くわ、兼々むさくつアても五六十年、幸池すればお駄佛、五十萬圓じめ子の、死だ、私行くわ、小母さん、急いで御めて下さいよ」

富世、娘、氣貫、一、赫と斯んなものか、兎角は地位を目的に結婚を訂し、財産をあてに結婚を促む、終生、苦辛を共にする、好意、道徳を捨て去り、金錢に嫁ぎ、財貨に引きつけらるゝ、世の中、一儂は、親を買ふと云ふた次で、金を買ふとは云はない」と、強姦を願つて去りし直肥君の、勇姿、流石に、源舟、先生の、冷、血は、等、はれぬ、武士的、氣骨、覺へず、快、歎、を、喚、は、し、む。

十二、平賀源内

平賀源内は、滑稽、人なり、八丁、堀、地、藏、儀に、借、家、せ、し、が、家、賃、に、し、て、店、賃、八、ヶ、月、も、満

る始末、開店、家主も、持て、歸、し、店、立、て、を、味、はした、夫、ち、や、仕、方、が、な、い、何、處、か、恰、好、な、家、を、見つけて、探、る、ほ、ど、に、それ、迄、得、て、呉、れ、と、云、ふ、て、出、た、が、御、方、輕、な、も、の、で、淺、草、新、撰、で、ま、ま、や、か、な、家、を、見、つ、つ、て、來、た、愈、々、それ、へ、歸、す、る、事、に、な、つ、た、が、家、主、の、曰、く、夫、で、は、八、ヶ、月、の、店、賃、を、持、つ、て、出、て、呉、れ、と、來、た、夫、は、ど、う、も、家、主、の、御、無、理、と、云、ふ、も、の、一、月、一、月、に、持、ふ、べ、き、店、賃、さ、へ、八、ヶ、月、も、溜、つ、た、世、だ、も、の、今、此、處、で、と、も、認、め、て、持、へ、る、譯、が、な、い、店、立、を、喚、は、した、も、の、だ、か、ら、奇、異、に、臨、め、て、お、仕、舞、い、な、さ、い、威、張、れ、も、そ、う、ち、や、仕、方、が、な、い、か、ら、お、立、退、き、な、さ、い。

さて、立退く時に、大、き、な、紙、へ、「御、手、に、つ、き、淺、草、新、撰、編、へ、引、越、申、候、平、賀、源、内」と、書、き、出、した、家、主、是、の、ま、い、事、が、店、立、を、喚、つ、た、く、せ、に、御、手、に、つ、き、と、は、何、事、だ、思、々、しい、氣、と、其、紙、の、肩、に、不、の、一、字、を、書、き、添、へ、「不、御、手、に、つ、き」と、した、二、三、日、経、つ、て、源、内、先、生、前、の、家、の、門、を、通、つ、て、見、ると、不、の、字、を、書、て、あ、る、「思

ふしい、奴、家、主、奴、ん、な、事、を、書、き、居、つ、た」と、肩、の、所、へ、又、「此、所」と、書、き、加、へ、た、即、ち、「此、所、不、御、手、に、つ、き、……」と、家、主、は、御、手、買、つ、て、終、つ、た。

無一文の、家賃を、返とせず、平然として店立に、家主を茶化して、裏の裏を、源内の、面、見、あ、げ、た、も、の、也、それ、も、其、時、新、撰、の、遺、稿、編、め、て、深、く、或、時、長、崎、に、遊、び、て、支、那、人、と、交、り、種、々、な、談、話、を、交、換、し、た、が、ど、の、支、那、人、も、若、日、本、人、の、時、は、短、い、と、云、つ、て、嘲、け、つ、た、夫、で、は、是、は、ど、う、だ、と、源、内、二、首、の、絶、句、を、書、い、て、彼、等、に、示、した、すると、彼、等、は、夫、を、見、て、高、笑、ひ、し、て、御、い、い、と、云、つ、た、何、處、が、損、い、と、訊、く、此、處、が、新、ち、や、あ、ー、ち、や、と、源、内、手、不、理、窟、を、つ、つ、て、嘲、つ、た、源、内、洪、然、と、し、て、曰、く、「馬、鹿、者、氣、味、が、是、は、貴、族、等、が、詩、の、神、像、と、し、て、居、る、杜、子、美、の、詩、ち、や、な、い、か、是、れ、此、處、に、此、詩、集、に、ち、や、ん、と、あ、る」と、その、杜、子、美、の、詩、集、を、出、し、て、見、せ、ると、彼、等、は、コ、ソ、ソ、何、時、の、間、に、か、逃、げ、出、し、て、仕、舞、つ、た、と、の、事、

日蓮主義より見たる無量義經

井村日威

佛言、善男子、第一是經能令菩薩末發心者發菩提心、無慈仁者起於慈心、好殺戮者起大悲心、生嫉妬者起隨喜心、有愛著者起能捨心、諸慳貪者起布施心、多憍慢者起持戒心、瞋恚盛者起忍辱心、生懈怠者起精進心、諸散亂者起禪定心、多愚痴者起智慧心、末能度彼者起度彼心、行三十惡者起十善心、樂有爲者志無爲心、有退心者作不退心、爲有漏者起無漏心、多煩惱者起

除滅心、善男子、是名是經第一功德不思議力。

(二九、七—三〇、七)

佛言、善男子、第一是經能令菩薩末發心者發菩提心、無慈仁者起於慈心、好殺戮者起大悲心、生嫉妬者起隨喜心、有愛著者起能捨心、諸慳貪者起布施心、多憍慢者起持戒心、瞋恚盛者起忍辱心、生懈怠者起精進心、諸散亂者起禪定心、多愚痴者起智慧心、末能度彼者起度彼心、行三十惡者起十善心、樂有爲者志無爲心、有退心者作不退心、爲有漏者起無漏心、多煩惱者起

十功德の第一淨心不思議力の文である、此經を信するものは現在生活の上に自然に無信仰の人に異なる點が顯はれて來る、如何なる方面に顯はるかと言ふならば、此の御經文にある様に種々の方面に顯はるゝ、此が實際的の效果である、此効果が顯はれて來ないのは信仰が本當に出來て居らぬからである、經文は大分長くあるが、此は發心と四無量心と六波羅密と六種心とで合せて十七種が擧げられてある、發心の大切なることは毎度申上げてあることであるが此經を信するに就ては菩提を求むるの心が第一に起

つて来ねばならぬ、菩提は我等が終局の目的物である、我等の信仰は菩提を求むる爲めに發せられなければならない、如來の出世は我等を導いて菩提の實所に至らしめんが爲であつて、他に何等の目的もない、若も菩提に導く必要が無いならば如來は出世し給はざるであらう、最初の出發を誤れば一切皆無駄になるが故に、茲には發心を第一に擧げて、正しき目的に向つて出發するを第一の要件とせられた、次の四は無量心であるが、此四つを共に無量心と言ふたのは、此經を信するものは利他の心廣大にして無量の衆生に對して無量の慈悲等を起すが故に無量心と言ふたので、此經を信するものは利他の心が常に猛烈に發作せねばならぬ、次の六波羅密と云ふも利他を主とし自利を従と爲したもので、共に此經を信するものは自利心よりも利他の心を主とせねばならぬことを教へられたものである、四無量心の第一は無量心で、慈とは愛念に名づくで、一切衆生を

愛念して彼の求むる處に隨ふて之を饒益するを言ふたので、世の所謂慈善家なるものが此慈無量心に當る、他を愛念することの出来ないものも此經を信すれば慈善家と爲つて世間の人々の爲に盡す處が無いねばならぬ、第二は悲無量心、感傷に名づくで、一切衆生の種々の苦を受くるを感念して常に悲愍を懷いて之を救済するを言ふので、世の所謂社會事業家の如きが之に當る、如來の教を信するものは世間の憂悲苦惱に對して充分の同情を以て之が救済に努力せねばならぬ、此經文には發生の事々擧げてあるがこれは一例である、第三に喜無量心、他の人の苦痛を離れ安樂を得るを慶んで其心悅豫欣慶するので、他人の成効を共に慶び合ふのである、嫉妬排擠の反對である、現今は嫉妬排擠を自己が榮達を計る第一要件と心得て互に蹴落とし合を仕て居る世の中であるが、夫は善き事では無い慎まねばならぬ、此經の信仰に入ればそんな汚い心は消へ去らねばならぬ、第

四に捨無量心は憎愛の心なきを言ふので、公平無私の心は愛憎の念を捨つるより起る、凡百の誤解曲事は愛憎の念、愛著の心より起る、此經を信するものは此過誤を遠離すべきである、此四無量心は佛教入門の最初に實行せらるべき修行であつて、又最後まで一貫して守られねばならぬ大切の修行であるが、現今の佛教の信徒と稱せらるるもの、中に其氣分すら無い様に思はるゝは慨嘆の至りである、「諸聖賢者」の下は六波羅密である、布施、持戒、忍辱、精進、一心、智慧の六は共に我等を生起の此岸より涅槃の彼岸に渡す所の行法なるが故に六度の行と云ふ、此六度は利他を主とし自利を従としたものであるが、此六度を實行するには當然自己の反省に出發せねば六度を實行することは出来ない、自己の我欲執著を打捨てねば布施も持戒も忍辱も實行は出来ないが故に、利他と同時に自身の修養を爲して行くものが此六度の行である、此經には自己の反省懺悔に

依り邪惡の心を去つて六度の心を起すべく説いたが此六度の行を實行するの結果は眞實の大功德を決定するので、此を六種決定と言ふて大莊嚴論の中に説かれた、布施の力に由つて必定して常に大財の成就を得、是を財成決定と名づく、持戒の力に由つて必定して常に貴勝の家に意に隨つて受生することを得、是を生勝決定と名づく、忍辱の力に由つて所修の善法必定して常に退失せず、是を不退決定と名づく、精進の力に由つて常に善法を修習して必定して間息あること無し、是を修習決定と名づく、禪定の力に由つて衆生正定の業を成就す必定して永く退失せず、是を定業決定と名づく、智慧の力に由つて功行を加へず、必定して自然に理に往す、是を無功用決定と名づくとある、財産家に爲りたかつたり、貴族の家に生れたかつたり、智慧者と爲りたかつたりするに六度の行を實行すれば決定成就できつと爲れると言ふてある、お賽錢や御祈禱で爲れると

は書いて無い、よく御考へなさらねばならぬであらう、「未能度 彼者」より下は六種心で、第一は自利に没頭して他を顧みざるものには利他の心を發さしむる、第二には十惡の心を去つて十善の心を起すて身には殺生、偷盜、邪淫の三惡、口に妄語綺語惡口兩舌の四惡、心に貪欲、瞋恚、愚痴の三惡を犯しつゝあるが、此を反省懺悔して犯さざる様に爲るのが所謂信仰である、此等の十惡を犯さざる様に爲つたのが十善の心と言ふのである、次の有爲と云ふは煩惱より發したる欲望を有爲の心と云ひ、其反對を無爲と云ふ、有漏無漏と云ふも大體同じ様な事である、其煩惱を起さざる様にするが除滅の心と云ふのである、何れも煩惱が根本の累を爲して居るのであるから、其根本より改善すべく努力せねばならぬことを言ふたのである、以上挙げた處を信仰に依つて得るを現在の利益と言ふ、實生活の上に斯様な善徳美德を發揮し得る様になれば、人格完成として普通の場

合に於ては充分と言はねばならぬ、然し佛教では初步に過ぎぬ、入門の第一歩に過ぎぬ、佛教の教理が如何に深遠なるかは此點から見てもお分りの事と思ふ、翻つて現代の佛教信徒なるもの、信仰状態を見ても如何にそれが如來の教法より遠かれるものであるかを考へて見ると實に々々何とも申し上げ難い、此でも佛教信者かと思はるゝ位である、煩惱より發作したる我利我欲を脱離もなく佛前に祈り、其成功を夢みつゝあることは、今經の十功徳の第一たる淨心不思議力と對照して如何に隔りのあることであらうか、一大反省を必要とすることでありませう、宜なるかな、末法萬年經道滅盡、後五百歲白法隱没と。

記 事

各地教信

名古屋教團

日經上人直建の由緒尊き宮總寺を東郊城山に移轉し、大名古屋市東西西南北兩幹線の交叉点に接して二千數百坪の跡敷地を掌中に、資力に祝福されざりし顯本教團の爲に巨額の宣傳費を生出すべく計畫されし壯舉は、幾多の難關に遭遇し、中途成功を疑はれしが、昨蒙遂に必要な認可の指令は、熟慮と調査に數十ヶ月を費せし當局の手を離れて、住職國友日城師に手交された。

理想の教化運動社會事業の設備は、目下住職の手によりて審意に計畫されつゝある、近く一切は具體化されて、十二分の實力を持つた超勞板板は現代思想界の驚異となるであらう。

一月八日妙教婦人會新年會、會する者大書院に遊る、國友師の講演、少女會員の遺文奉讀、相澤愛子の琴、新界の名手志呂根氏の養大夫、及福引等あり、信仰娯樂の理想的に調和された會合であつた。△二十一日、日蓮

主義大講演會。「時弊平正の要道」能仁事一師。△十九日四日市安樂寺に於て、「時弊平正の要道」能仁事一師。

又次の程により能仁師を講師に、自慶會の講演があつた。△二十日豊田本社「理解と信念」△同日豊田織機尾頭工場「實力の人」△二十一日豊田切心「心のはまりは身のはまり」△同日豊田織機「心の融通」△二十二日山岸製材「理解の餘美」△同日日蓮定商店「實力は修養なり」△同日日共立學校「時弊平正の要道」△二十三日三葉内燃機「實力の人」

京都總本山教信 △十一月八日は午後七時第二回青年會開催、出席者三十名、講話

「三毒を呑むべからず」原田本部長長討論會有りて議長に細野辰雄閣下を揚げ會員の熱烈なる思想開議の音戦有りて盛會なりき。次回討論問題は「文化生活の可否」△十二日府下綾部町了四寺に於て御會式最修。「感恩」中島孝治氏。「現代に於ける日蓮主義の使命」杉村勇

大野閣下、「生活の安定」原田本部長。△同日大坂蓮成寺に於て御會式最修後豊田有田兩師の設教。△十三日開所に於て御正當法要最修後豊田有田兩師の設教。△十六日午後一時半より京都統一團秋期總會開催。會員先遣代々菩提の爲め法要最修。「法話」本多日生現下。

△同日午後六時半より山口教育館にて京都立正會秋期大會開催。「開會之辭」立正會理事長西村吉右衛門氏。「教團に就て」陸軍少將杉村勇次郎閣下。「現代の思想問題に對する日蓮主義覺悟」大僧正本多日生現下。來臨者五百名盛會なりき。△十七日午後七時、本山講堂に於て例會講演。「因縁果に就て」土持良達師。「應身常住の妙義」藤原日蓮師。△廿八日午後二時本山にて開山會修行後講演。「所感」在管口岡松乾丈師。△三十日、日曜日曇天なりし

も健兒會員、統一團青年會員等遠足會を催し日蓮上人御遺學の靈蹟へ参拜の爲め午前七時本山出發出町電車終点より下鴨へ参詣し同社の森を通り高野川、東橋を北に向ひ北東手に修學院の古蹟(石川丈山)難宮などを遠見し北西手小松ヶ崎大黒天などを見て山陰をすぎ漸くにして八瀬村に到着し後醍醐帝遷城の爲め彼より矢を迫り御傷をいこわせられたる。(登

風呂の舊殿を見て山道を登り横川へ着き日蓮上人丈六の御銅像を拜し、横川中堂其他古蹟を探り、道を江湖阪本へ取り意義ある遺足なして坂山す。△十二月十三日夜健兒會主催義士會開儀、「中村勲助の傳」中村恒次師、「外傳大橋茂右衛門」中島孝治氏。「忠義」金光孝碩師。「太郎作(後の神崎與五郎)生立」土持真途師。「大石良雄東下り」有田宏道師。終りて來會者百五十名に對し茶話會を開き會員一同壯烈なる義士の行状を追慕し解散せり。△十八日夜於本山講堂例會。「十知是に就て世論の批判」三好眞月師。「時を歴て彌々輝」紀野俊輝師。「宗教と教育」藤原日道師。

京洛布教通信 △十一月八日日本正寺二樂會例會。「開會の辭」金光會長。「無價の寶」中島孝治。「大勢に目醒めよ」陸軍少將杉村勇次郎閣下。「須らく日蓮に歸れ」國友文學士△十一月十日日本正寺宗祖御會式法要。「滅後の教訓」三好眞道。

大阪教報 △十一月五日夜精華小學校にて、振作更張の時「京洛布教師」△八日堂開寺にて、「日蓮聖人の大恩」京藤山主。「宗教の五果」藤啓純師。△九日山本宅にて、「佛陀の慈光」京藤布教師。△十四日大抵俱樂部にて、「法華修

行の安心」本多日生聖下。△十五日東平野小學校にて「國と人と教」京藤布教師。△二十三日相馬宅にて「信仰の要義」上田智量師。△二十五日集英小學校にて女中慰安會「女子と修養」京藤布教師。△十二月七日木津抄榮寺にて深信會「開會の辭」藤山主。「國民精神」京藤布教師。△十二日、勤儉の道徳的價值「石井得雄氏「淨化の生活」和井田寛舟氏。「正しき道へ」京藤布教師。△二十二日關東植樹者追悼法要講演。京藤山主導師の特に嚴肅なる法要を修し、直に講演に移り、「法華經より觀たる八正道」石井得雄氏。禮と禮證「和井田寛舟師。「國民の自覺」京藤布教師。何れも盛會多大の効果を奏せり。

廣島教信 △新年宴會 一月七日午後五時より松岡町妙跡寺に於て新年宴會を催し、能仁二十師試作宗教心は能仁の實演あり、來會者三百餘名、盛會を極めた。△妙跡婦人會一月十二日妙跡寺に於て例會を開く、「日蓮教徒の行道」能仁二十師。△日蓮主義講演會川崎教務部長の來廣を期とし本願寺妙跡寺に於て一月十七八の兩日開催し、此日降雪寒威を極めし來會者は熱心に聽講した。兩夜の講師及演題は左の如くである。「宗教心理の研究」

能仁二十師。「合掌の生活」岡崎英照師。(妙跡寺)「人と教」島田憲一君。「人間苦の宗教」岡崎英照師。(本願寺)

千葉教信 第四布教區二宮本郷村岡野園では一區全戸の主婦を以て婦人會を設立し、着々功績を挙げつ、あり十月十四日午後二時より秋季大會を催し、横川甫正の「婦人の教養と國力充實」と題する有益なる講演あり、更に兒童學藝會があり、頗る盛況にて來會者に偉大の印象を與へた。

前の内教信 常覺寺に於て左記中嶋元道師の講演があつた。△十月十日夜龍口法華會執行。「龍口の御法難を思ふ」△十六日夜「婦人講」。「夫婦は人倫の大道」△十一月八日例會式舉行。「立正大師を追慕し奉り」△十二月八日十二日講。「充實せる生活」

金澤布教 △十二月十三日夜、立正會講演形式より「精神」本郷常次郎。△十七日夜「日蓮聖人傳」續、本郷氏。△十八日午後三時本行寺講演「日蓮聖人の慈悲」本郷氏。△廿二日午後三時本長寺講演。「女人成佛」藤田純榮師。「法華經講義續講」本郷常次郎氏。△廿六日於本長寺天晴會講演「人記品概要」藤田師。「大藏經講義」本郷氏。

朝鮮釜山に生れ出る會堂と

寄られた同志の同情

學校を出ると直ぐ朝鮮へ渡つて、赤手空拳開教の爲に心血を注いで居つた、二三訪れた者はあつた様だが、本教宣傳に誇つて、而もどうかすると開教に無關心な顯本教團の人達が、モンヤリして居る内に、横山惠正師は釜山の中心地等に會堂の敷地を購入し、更に大道場建設の具體案を携へて同志の義捐を促すべく函京した。

皆んなは感激して其の志を喜捨したが、壯烈なる淨事は殊に血の氣の多い人達に共鳴された。少いが貴い資財は總合宗學林の若人がら、遂に苦闘せる横山師を泣がせたのであつた。

横山師の書信

合掌、愈々清安爲法國慶賀の至りに存じ候、本日東京宗學林教會生徒一同より同封の書面と金子拾五圓を添へ會堂建設の費用として送り、され候、小生感激の涙を催し候、現

在宗學林に居らる、生徒諸君が、將來一人も現らず大法宣傳の陣頭に立つ勇士者である事は知りつ、も學生時代になつて五十圓の金額を他出す事はなかつ、の事にあらざれば出来難く候、然るに今回の如き美事は珍しくも眞面目にして道念に燃へての事と思はれ候、異境の地に居る小生としては只難有候、深く佛天に感謝し、更に一段の自重を加へ、熱誠なる御援助を下さる皆様の御心に添ひたきものと佛祖に御誓ひ申候。是非同封の原稿は統一詩上に御裁裁願入候。

十二月十九日朝

國友日斌尊師

惠正拜

總合宗學林生の書信

合掌、向寒の剛貴教會益々御發展爲法爲國奉賀候進き異境にありて幾多の困難と戦はれつ、大法弘宣の聖業に御奮闘の段こそは生等

一同奮々身を以て示さる、御教導を厚く感謝いたし居る次第に御座候此度海外傳道の根據地として新なる會堂の建設せらるゝを聞き一層大なる力強さと感激を感じ申し候離れては親しく御手傳ひ申上る事もかなはず同封の金子は聖業に對する生等の微志として御受納被下度候法蓮の御發展を祈り重ねて御教導賜はらんことを願上候 敬具

大正十三年十二月十七日

總合宗學林教會一同

横山惠正上人

九州大牟田の新寺

九州大牟田市の原武儀市氏は、渡邉新興寺の出海使義師の教化により、其の所有の大牟田市松原町の宅地數百坪を提供して、新に顯本教團の一寺院を建立する事を發願し、舊顯中國友僧正數回四下、一切の準備を完了し、寺號を原武山本孝寺と命じ、目下當局の認可を申請中である。

朝鮮釜山顯本會堂建立淨財勸募之辭

人心思想の如何によりて強大なる國家の基礎も一朝にして倒壊し廣大なる世界の平和も之が爲に混亂せられ光輝ある文明の建設得て望むべからず。斯の如き事實歴々として吾人の面前に展開し來たる。大聖釋尊は曰く「毒蛇猛虎よりも恐るべきは惡智識なり」。聖者日蓮は曰く「國土亂れん時は鬼神亂る鬼神亂るが故に萬民亂る」と然るに今や舉世滔滔として懷疑の弊に陥り精神の力を失ひ物慾の追求に疲れて暗黒の野に彷徨し一點の清光を認め得ざるもの多きを致せり。今にして風教を作振する事無くば浮華輕佻の風一世に瀰漫し民心益々動搖國力漸く空虚を來し復た如何ともすべからず。殊に朝鮮は我日本の併合以來爰に拾有餘年、著々教育と産業の開發に顯著なる成果を見も、末だ宗教の方面に於ては其の緒を見ず、之が爲に下層鮮民の多くは未化の思想に煽動されて遂に不逞の漢を見るに至る苟くも心を邦家の前途に繋ぐる者豈爲心戮力以て之が救援に努めざるべからず。其の救援の術は日蓮主義の思想を以てせば斷じて不可能也。不肖橫山墓正通る大正四年拾月海外宣傳を志し單身渡鮮を決行す、想へば六百年の昔國土日持上人は聖者日蓮の遺教を奉じて海外宣傳の雄圖を懷き單身北海の波を瀆つて露傾北滿の天地に世界統一の大義を獅子吼せられしを回想する生等の血は自ら湧出で、聖戰の陣頭に參加するの光榮を喜び翌大正五年二月十一日日蓮讀仰天晴地明會を設立し大正十一年五月顯本布教所を設置して日蓮主義の宣傳に微力を致す、其間あらゆる困苦多々なるも漸くその教化の實現れ爰に今夏釜山中樞の位置に會堂建築敷地として九拾壹坪の土地を購入し更に會堂建立の計畫も己に成り來春二月工事に着手せんとす、希くば隨喜よりの士女、の聖業を贊助し淨財を喜捨し以て發願を成就せしめん事を。

大正十二年十二月

發願人

橫山墓正 永見京造 江川傳太郎 熊本新
別府 誠吉 矢頭伊吉 吉川義治 上西收五郎

寄附金募勸事項

- 一、敷地九拾壹坪 金九千餘百圓
- 一、會堂五拾六坪五合 金八千九百六拾圓(棟互建)
- 一、工專着手 大正十四年二月
- 一、工專完成 大正十四年七月初
- 一、雇運二拾八坪七合五勺 金參千九百七拾圓(棟互建)
- 一、寄附金は朝鮮釜山大顯町顯本布教所へ申込及納入願上候。

精神教化

紙裝菊版二百頁 壹部金八拾錢送料金四錢

工場教化に就て……大僧正 本多日生宛下
本分……海軍中將 佐藤鐵太郎閣下
國民の自覺……文學士 小林一郎先生
人間生活の基調……陸軍少將 野澤 梯吾閣下
完全の 人……陸軍少將 伊豆 凡夫閣下
労働者の思想善導に就て
資本家に望む……文學士 小林 一郎先生

大僧正本多日生師著

法華經自我偈講義

一部金貳拾錢 郵税金貳錢
拾部特價金壹圓 (稅共)

第四十二版印刷發行

發行所

統一編輯局

名古屋市東區田代町城山

振替名古屋一〇八一九番

社寺建築及臺灣檜材の安價提供

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及內務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候
追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

東京市麴町區有樂町三丁目三番地

社寺工務所

(電話銀座四〇八八番)

神奈川縣 鶴見町

社寺工務所鶴見支所

福岡市外堅箱町馬出松原

社寺工務所福岡支所

(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社寺工務所大阪支所

(電話西三二二四番)

臺灣檜材の六大大特徴

- 一、耐久防腐
- 二、蟻害絶無
- 三、香氣清楚
- 四、木質堅緻
- 五、木理整然
- 六、木色高雅

本多日生現下施本用著書一覽

- 法華經自我講義 拾部 特價 金貳拾錢 (送料共)
 - 法華經要文 (實切れ) 上製金壹圓(送料共) 金貳拾錢 金壹圓(送料共)
 - 教育勸語と思想問題 拾部 特價 金貳拾錢 金壹圓(送料共)
 - うゐの奥山今日こえて 拾部 特價 金貳拾錢 金壹圓(送料共)
 - 佐藤海軍中將著
○此の際に於る吾人の覺悟 拾部 特價 金壹圓(送料共) 以上各送料一部金貳錢
- 右講讀希望者は左記へ申込んで下さい
名古屋市東區田代町城山
編輯局

電話東五八八七番
名古屋一〇八一九番

統一定價		統一定價	
一ヶ月	半年	一冊	一冊
金貳圓貳拾錢	金壹圓貳拾錢	金貳拾錢	金貳拾錢
送料共	送料共	送料共	送料共
金貳圓貳拾錢	金壹圓貳拾錢	金貳拾錢	金貳拾錢

統一廣告料		統一廣告料	
四分	一分	一頁	一頁
金九圓	金五圓	金貳拾錢	金貳拾錢
送料共	送料共	送料共	送料共
金九圓	金五圓	金貳拾錢	金貳拾錢

書畫揮毫紹介廣告

肖像畫 絹本墨參尺幅貳位半身圖、料金五圓以上拾圓、但當分少々割引いたします
佛位料金參圓以上、但し或部分は特に注意をなし古名家の筆を臨摹し以て謹寫す
畫の部 白唐紙襖張四本、料金壹圓以上四圓○掛軸用畫仙紙聯落壹枚、料金五拾錢以上
郵券拾五錢にて淡彩小品畫を呈します但し御注文の方には此郵券を返戻し別に色紙形羽二重に揮毫した下さいませ○御注文は前金御紹介は返信料御添へ勉強せるかをおためし下さい懇請いたします 謹白
京都府福知山町字本町
みやこ呉服店內紹介部

大正十四年一月十七日印刷納本(第三百五十九號)
大正十四年二月一日發行(第四百十二番地)

編輯所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
印刷所 名古屋市中區千種町字五反田五二番地
編輯所 名古屋市中區田代町字城山七十七番地
發行所 名古屋市中區田代町字城山七十七番地
印刷所 名古屋市中區田代町字城山七十七番地

目次

我が教徒の特色を發揮せよ……………	本多日
マイル・ストオン……………	古田昂
日蓮主義より見たる無量義經……………	井村日
法華經要文講義……………	本多日
童話「牛」……………	中村し
罷唾録……………	山根日
記事報導……………	東

第廿九年參月號

